
七英雄物語 2

七英雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七英雄物語 2

【Nコード】

N9698A

【作者名】

七英雄

【あらすじ】

ゲルニア国の滅亡により、毎年5年毎に行われるガルド会議。いつものように簡単に終わるはずはなかった。物語の中心となる登場人物が数々現われる！加速度を増す英雄ファンタジー小説第2弾！

第2部 ガルド会議 プロローグ 神殿

8国で成り立つ世界バロゲニアガルドの本島には、5つの国がある。アーガス、ニゴラス、ロクシーヌ、ルキボル、ガシーベ。それに続き、3つの島、ゲルニア、ドルゴルド、バリユアスの3国で合計8国になる。

本島の中心に、大きな岩壁で囲まれた神殿がそびえ立っている。どの国にも属さない神殿。バロゲニア神殿。ガルド歴910年、そこで5年毎に行われる『ガルド会議』が開催される。

今回で第9回目になるこの会議は、各国の首脳が集り、情報交換、外交、取り決めなどをする会議である。この神殿の中ではどんなに戦争中であろうが、憎しみがあろうが、争いは起こしてはいけない。そういった世界各国の掟なのだ。

この会議で話題になるのは、間違いなく突然のゲルニア国滅亡の件。噂によると、パール族が関わっているということにより、パール族発祥の地といえば、ニゴラス国であるため、ニゴラス国になんらかの質疑応答があるだろう。

絶望神復活という恐怖の中、波乱の予感がする第9回ガルド会議。各国の思惑が渦巻く世界を受けて時は進む。日は昇り、そして日は落ちる。神話の伝説が、希望が、絶望が再び舞い降りてくる日まで遠くはない。

バロゲニア神殿の神官は、代々受け継がれてきた血筋である。8国が揃う前から、この場所は神聖で清らかな場所であった。

世界の情勢や秩序を見極める役目の他に、神官は血を絶やすことは許されなかった。次の代となる男子を必ず儲けること、その男子にもしものことがあるといけないために、第2子、第3子と常に儲けなければならぬこと。なので、この神殿に住む人々は代々大人

数の家族で構成されていなければならない。

神殿の大神官を務めるデスペラドは60歳になり、そろそろ後継ぎのことを考えなければいけなかった。

デスペラドの後を継ぐ息子が4人いる。この内の誰かを次世代の大神官に考えているのだ。

無事ガルド会議が終了し、その仕事ぶりを見ながら決定するよう
に思っていた。

大神官デスペラドは気づいていない。

闇に包まれたドス黒い悪意に満ちたその瞳を。

瞳は、じっと、デスペラドを影から見据えていることを。

何か別の勢力が動いていることを。

第2部 第1章 各国集結 その1

バロゲニア神殿の外はお祭り騒ぎの如く盛り上がっていた。

商売をしている者にとつては、これほどの儲かる場所はない。5年に1度の会議で、しかも各国の首脳が勢ぞろいする。

だれもが目見ようと、集ってきた。神殿の外にある町は普段は静かな町で、住んでいる人間も多くはない。家族のほとんどは神殿に住み込みで働いているからだ。その静かな町が、この会議の時期になると一気に様変わりする。各国の商人や旅人達が次々に現われて、勝手に路上店を出す。一国の町と変わらぬ賑わいが僅か一週間だけ訪れるのだ。

このような騒ぎは普通であれば、神聖な神殿を汚していると、糾弾されることであるが、この時だけは神殿も目をつむっている。

神殿に入るためには、当然だが入口の門を通らねばならない。門は一箇所のみで、門番の確認のあと入ることを許可される。神殿を攻められた時の備えである。門以外の場所は通過できないほどの大きな高さの岩壁。進入するには必ずこの入口の門を通過しなければならない。

そうになると、門の警備はかなり厳しくされている。門番が2人。その後にさらに何人かの番が待ち構えている。武器の持ち運びは基本的にには許可されない。特別として、各国の王を守るために少数は持ち込みが許可される。

門を通過すると、今だけ賑わっている先程の町グレン。お供の兵士や身分の低い者、商人、旅人はここで宿泊をする。

町を少し越えると、フライと呼ばれる大きな建物がある。そこは各国の首脳達が寝泊りする宿泊施設となる。警備も万全であるし、各国の警備隊が守るため、暗殺などの間違いが起きることはない。

そこで、その先にようやく神殿が見えてくる。これが、どの国家にも属さない神殿、バロゲニア神殿。

この神殿内で歴史的会議、ガルド会議が開催される。
会議開催まであと3日。

門番をしているサウザとマイズナは連日やってくる見物人などの確認でうんざりしていた。掟で争いをしないのはあくまでも国と国、神殿との取り決めで、実際どこの国にも入らない者からすれば、そんなことは関係ない話であって、掟などどうでもいいと思う悪い輩がいるため、やはり見極めとして立っていないといけない。

結局世界の掟などはその気になれば簡単に破ることができるのである。各国の王は勿論理解している。だが、それは国の頂点に立つ者として、器の小さいところは見せるわけにはいかない。事実世代はかわっても、第1回ガルド会議の開催からは国同士の戦争は一度もない。大事にならない程度のいざこざや国内の紛争はあるかもしれないが、それはその国が解決すべきことである。

「今日からだな」

サウザがいつになく緊張した顔で言った。

「ああ、そうだな」

それを受けてマイズナも頷いた。

今日から各国がやってくる予定日であるため、無礼なことではないし、しっかりと職務をまっとうしなければならない。

そういえば、門の周りが慌しくなっている。見物人が集り始めたのだ。

マイズナは後ろの人間の動きにも気を配りながら背筋を伸ばした。サウザも同様にいつでも迎えるように準備している。

「…」

突然背後が異様な感覚に捉われた。寒気がマイズナに直撃した。反射的にマイズナは後ろを振り返った。

「…あ」

金髪の若い男がマイズナの後ろにぴつたりと付いていた。

「うつわ」

思わずマイズナの声が裏返った。

「ありゃ、ごめん、ごめん。近づきすぎちゃった。いや、ぜんぜん来ないからさ、覗いちゃったよ、まだかなって…」

「限度があるだろうが！」

「だからごめんって」

既に門の中に入っているところを見ると数日前にきた旅人だろうか。さすがにこれだけの人数だといちいち覚えているわけがない。

「さつさと離れる」

「あいあい」

面倒臭そうに金髪の若者は返事をした。その返答にマイズナの苛立ちはまた募る。

「じゃあねえ、門番さん、僕の名前はシールってんだ。よつろしつくな」

シールと名乗った金髪の男がその場を離れて人ゴミの中に消えていくのをマイズナは見届けてから、改めて向き直った。同時に辺りが騒ぎ始めた。どうやら到着したみたいだ。

最初の到着により、ざわめきと歓声を聞きながら、100人程の兵を引き連れて馬車が門へと向かっていた。

先頭にたって先導している鷹の紋章をつけた仮面の騎士が調子良く言った。

「さすが、我が国、いや、我が王の人気は不動ですな。やはり、この世界は我が国アーガスでもっているようなものだ」

仮面で覆われているため表情は確認できないが、その騎士は少し興奮気味に話していた。歓声が自分のことのように思えるのだろう。それを聞いた30代前半の無精ヒゲを生やしている男は溜息をついた。この男もまた馬車を先導している騎士の1人で鎧についている鷹の紋章が光って眩しい。

「何を言ってるジューダス殿。我らが最初の入門国だから騒いでおるのだ。そんな勘違いをして、変な事を方々に話さないでくれよ」

ジューダスと呼ばれた鷹の仮面の騎士は、無精ヒゲの騎士を見た。「わかっておるよ、スノー殿。しかし、貴殿のように真面目に答えられたのでは面白味に欠けるよのう。だから未だに一人身なのだぞ」ムツとして無精ヒゲの騎士、スノーはジューダスを睨んだ。

馬車の中から小さな笑い声が聞こえた。

その声をスノーは聞き逃さなかった。

「聞こえたぞ。その声はジェイミー殿か。失礼ではないか」

馬車の小窓が開いて、少女が顔を出した。首に鷹のネックレスをしている。

「いや、失礼、いつものこととはいえ、2人のやり取りが可笑しくて」

あどけない笑顔でジェイミーと呼ばれた少女は言った。ジューダスとスノーの言い合いは日常茶飯事のことで、ここに来てまでそれを繰り返している2人が滑稽にみえたのであろう。

「ダニエル国王も笑っておられる」

ジェイミーは続ける。

「それにしても、もう入門です。2人ともそのへんにしたらどうですか」

ジェイミーが2人をたしなめた。

「アーガス国、ダニエル王の入門である」

サウザが大きな声で周りに聞こえるように叫んだ。

アーガス軍は門を勢いよく通過した。

見物人達の声が後ろから聞こえる。

「見たか？先導していた2人の騎士」

「ああ、アーガス鷹の三騎士だ」

「さすが威圧感あるなあ」

アーガス国には3人の騎士がいる。鷹の紋章がそれを示していて、仮面の騎士ジューダス、無精ヒゲを生やしているスノー、馬車内で王を守っている少女のジェイミー。この3人がその三騎士と呼ばれていて、王のダニエルを命にかえても守り抜くように教えられている。鷹の三騎士といえばまず知らない者はいない。

馬車を通り過ぎるのを確認してマイズナは、次の国に備えようとしていた。またしても後ろに気配を感じる。まさかと振り返った。
「ねえ」

今度は、赤い髪に染めている女が、先程の金髪の男シールと同じような位置に立っていた。

「…なんだ？」

さすがに驚き度は小さかった。

「シール見なかった？」

「…は？」

「シールよ、シ、イ、ル」

その名前は間違いなくあの金髪の男のことである。なぜなら自分で名乗っていたからだ。いや、それ以前に、こんな聞き方はないだろう。マイズナは赤髪の女を睨んだ。

「いきなりなんだ？知らない、そんな名前は」

「…あつそ。門番のくせに。じゃあ用はないわ」

「…！」

赤髪の女は、煙のようにその場から離れた。釈然としないのはマイズナである。あれが物を聞く態度か？しかも突然名前だけ言われてわかっていないことが無理というものである。あんな憎まれ口を叩かれるくらいなら、正直言えば良かったと後悔した。

マイズナがブツブツと独り言をいっているとサウザが口を出した。

「おい、次がきたぞ」

サウザとマイズナは再び背筋を伸ばした。

つづく。

第2部 第1章 各国集結 その2

マイズナがどんなに目をこらしても、それらしい馬や軍などは見えなかった。先程のアーガス国は砂埃が舞うほどの勢いであったが、どうみても何かが向かっているようには見えなかった。サウザは何を思っ「次がきたぞ」と言ったのであるうか。

「よく耳を澄ませろ。聞こえないのか」

マイズナの曇った表情で察したのか、サウザが言っ

た。サウザの言葉に倣ってマイズナは耳を澄ませた。

「…っ。あっ」

マイズナの口から驚きの声が出た。

確かに馬ではない。馬車ではない。足だ。大勢で歩く音が聞こえてきたのだ。

ザッ、ザッ、ザッ。

サウザが姿勢を正し、お決まりの台詞を叫んだ。

「バリユアス国、ブラウフィッシュ王の入門である」

バリユアス国はゲルニア国同様、島が国となっている1国である。ガルド歴870年。8国の中で最後に国として認められた国であり、この年は第1回目のガルド会議が開催された年でもある。

その当時の王は亡くなり、息子がバリユアス国を継いだ。

各国は、孤島の国ゲルニア、剣の国アーガスや魔法の国ニゴラス、異教徒の国ロクシーヌ、女傑の国ガシーベ、医療の国ルキボルといった通り名が付いている。バリユアス国は美食の国と呼ばれていて、世界の美味な食物はほとんどここから取り入れている。

一番の強みは食生活による栄養、健康、美容。健康となると、医療国ルキボルには劣るかもしれないが、恵まれた食生活のおかげか、長生きが多い。亡き先代の王は110歳まで生きていたという。

だが、それよりも最も国を潤すものは美容である。バリユアス国出身の女性は美しいというのは有名な話で、各国の女性達はバリユアスの食べ物を好んで食べている。必然であるが、女傑の国ガシーベとは国同士仲が良い。

ここまでだと、未来のある非常に素晴らしい国のように思えるが、肝心なことを忘れている。国の頂点、指導者たる国王が、横暴で人望すらない独裁者だということである。

バリユアス国のある島から船で本島まで（正確にはルキボル国から）移動した後は、このバロゲニア神殿までずっと歩きで1週間かかる長旅となった。全ては王であるブラウフィツシュの下した命令である。

王の生活管理を任されているルリードとしたら、毎回思いつきで決める事柄にうんざりしながらも、なんとか不満をもらす下を抑えながらやってきた。国の全ての業務はルリードがやっているといつてもいいだろう。女でありながらその大胆で強気な行動は、周りの男達からも一目おかれる存在になっていた。

「ぶわっはっはっ」

下品な笑い声を発しながら、太った男が堂々と先頭を歩いていた。ブラウフィツシュ王である。ギトギトの脂汗を流しながら苦しそうな素振りを全く見せずに誰よりも速く歩いている。

その後に続くのはルリード。女性で長身、しかも細い身体、見るからにか弱そうに見えるのだが、汗をかいている様子はない。ブラウフィツシュ王の後ろをぴったりと寄り添って歩いていた。短髪のため、後ろから見るとよく男に間違えられる。

「ぶわっはは。歩くのは身体に良いぞお。なあ、ルリード」

唾を飛ばしながらブラウフィツシュ王は豪快に笑いながら、手に持っている骨付きの肉に喰らい付いた。

「ええ。そうですね」

至って冷静にルリードは受け答えた。彼女はどんな事にも感情を出して話すということはないように見える。

その後を、側近の1人であるムトウが汗を大量に流しながら歩いていた。同じように50人程の兵も動かない足を無理矢理気力で動かしながら付いてきている。

「あ・あの・ルリードさん」

ムトウは苦しそうに声を出した。国の男の中でも体力には自信のあったムトウだが、この想像外の速さに呆れも通り越して、気分が悪くなってきていた。

ムトウの声を聞き、ルリードが少しだけ振り返った。しかし歩くことは止めない。

「す・少しだけ・休んでもいいですかね？」

上目使いに、ルリードの顔を窺いながらムトウは言った。

ルリードは冷たい視線をムトウに浴びせてから、前を向いた。その寸前に冷たい声で言い放った。

「王に聞け」

するとブラウフィッシュ王が勢いよく振り返った。汗が四方へ飛び散った。

「このポケムトウがつ！休むだあ？誰が休んでいいって…言ったあああ！！」

「もっ、申し訳ありません」

「いいかあ！貴様ら！ワシの許可なく休むことなど許さんぞ！いいなあ！もうすぐ入門だ！バリユアス国の恥にならぬように覚悟して通りぬける！」

ブラウフィッシュ王の号令と共に兵たちの返事が聞こえ、歩きの軍隊は入門していった。

茶色の長い髪を後ろで束ねている青年が、バリユアス国の入国を見ていた。その青い瞳は軍隊で唯一の女性であるルリードだけを映

していた。軍隊はそのまま、まさに足早に門を抜けていった。

それを見ていた中年の男が話しかけてきた。

「おい、グリークスじゃないか、お前、こんなところにいいのか？」

中年の男は、青年のことをグリークスと名を呼び、近づいていったがその視線の先をみて、ニヤリと笑みを見せた。

「ああ、あの女だろ。あまりにも冷静に行動するってんで、氷のルリードって呼ばれてるんだ」

男は馴れ馴れしく茶色の髪 of 青年、グリークスの肩に手を置いた。更に続ける。

「でもなあ、ルリードって美人だよな。だけど、あのブロウフィッシュの女だって噂だぞ。ま、噂だけだな」

そう言つと、男はまた別の誰かを見つけたようで手を挙げながらその場から離れた。

「氷……か」

グリークスは身を翻し、神殿の方へと歩いていった。その姿はどこか気品があり、貴族のような雰囲気醸し出していた。

男達が話している。

「おい、あれ、グリークスだぞ」

「本当だ。あいつ、ここにいるような暇ないだろう」

「そりゃそうさ、ガルド会議が始まるんだぜ、忙しさに決まってる。きつと下見かなんかだよ」

「……だな。大神官デスペラドの4人息子。その末っ子グリークス。こんな所で油売ってる時間はないはずさ」

マイズナは手で口を隠して欠伸をした。早朝からずっと門の前に立っていて疲れていたのだ。まだ2国しか入門していないし、あと5国の入門を確認しなければならなかった。

昔から真面目だったサウザは全く疲労感を見せずに黙って立ち、

入門してくる旅人の確認をしている。

「おつ、何か見えるぞ」

見物人の声に、マイズナとサウザは振り返った。

「…え？」

マイズナは呟いた。

それはおかしい光景だった。

門へ向かつては来ているのである。それは間違いない。馬も見える。それに乗っている人も見える。

だが、おかしい。

マイズナとサウザは顔を見合わせた。

「何かの間違いでは？」

サウザが言った。

「いや、確かに、目印は白い馬…」

書類を見ながらマイズナが小さく言った。

改めて確認のためもう一度見る。確かに綺麗な毛並みの白い馬である。

「間違いないな…」

サウザは言って、背筋を伸ばした。

「ルキボル国、オークランド王子の入門である」

そうは言いながらも違和感は拭えない。サウザだけではない、マイズナも見物人も同じ感覚だったはずだ。

入門しようと向かってきているのは、白馬に乗っているオークランド王子。

だが。

たった1人での…入門なのである。

つづく

第2部 第1章 各国集結 その3

医療大国ルキボル。医療に関して絶大なる力を誇る国。その歴史は古く、ガルド歴743年に立ち上がった。人を病魔から打ち勝つ。治す。…という単純明快な目標のもと、現在まで戦争にも巻き込まれずに至っている。

他国との戦争がない理由としては、各国に散らばっている医師の半分以上がルキボル国出身者だからである。事故などではなく、病気を治療することに人種も国境も関係ない。ルキボルは恨まれるどころか、喜ばれている国なのだ。

反面、国内での揉め事は多く、今回のこの会議で王子1人の出席がその深刻さを物語っている。

数ヶ月前、国王が突然死去した。それにより、次期の国王を決めなければならない。運が悪いことに本来ならあるべき遺言状が消えていて、どこにもないのである。国王も日頃から特定の人物を跡継ぎにとは言っていなかったために、全くの白紙状態となってしまうた。

国王には3人の王子がいて、各々3人の取り巻きは王を狙うべく王子達をそそのかし、見事王子もその気になり、血の繋がった兄弟の世代戦争へと発展していった。

そんな状況で、北の孤島の国ゲルニアが滅亡しようが、ガルド会議が始まるうが、どうでもいい扱いになり、3人の王子の中で、一番頼りない、欲のない次男である、オークランド王子が行くことになった。

残念ながら、長男と3男よりも次男のオークランドは決断力もなく、人を惹き付けるようなモノも何もない王子であった。2人の王子もオークランドは敵ではないと、最初っから相手にもしなかった。いざ、ガルド会議へと旅立つ時にも、お供をする者は誰もいなかった。何人かはいたかもしれないが、他の圧力のせいで話すら出来

なかった。

過酷な条件での出席はオークランドにとって苦痛の以外のなにものでもなかった。味方はかつてオークランドに勉強を教えていた教師から譲り受けた白き愛馬ストラング。この白馬だけがオークランドの味方であり、友だった。

門が近づいてくる。それに従って見物人の物珍しい視線が痛い。だが、慣れている。そういう視線はいつものことだ。…とルキボル国、オークランド王子は心の中で言い聞かせた。

オークランドは白馬ストラングの首を撫でる。

「皆が驚いているよ、ストラング。それもそうだね、他国は大勢で来てるはずなのに、私達はたった1人なのだから…いや、お前を入れてなかったね、そう、2人だね」

それに反応してストラングは小さく唸った。

他国への不安はあったが、オークランドは内心ほつとしていた。

国内での緊張から少しの間だけでも逃れられるのだから。城の中の噂話、妬んだ目、精神的にボロボロの毎日だった。

恐怖があった。

兄弟2人にはない。側近ではない。国民でもない。自分自身でもない。

ある真実を知ることにある。

父である国王に『手渡された』真実を見る恐怖。

死ぬ間際に渡された一通の封をした手紙。

誰も存在を知らない手紙。見つけることができなかった手紙。

オークランド王子にはそれは何かわかつている。

その内容も開けずともわかつている。

自分はその器ではないのに、なぜ父は手渡したのだ。

オークランドは胸の鎧を擦った。この中に、その手紙が入っているのだ。

兄弟は気づいているのだろうか。この手紙の存在に。

3人の王子の誰かを跡継ぎと指名している運命の遺言状を。

見物人達が一騎しかいないことに不思議な表情を見せている中、オークランドを乗せた白馬は静かに門を通り過ぎた。

「うわっ、ひとりだ、ひとり。さっみしい」

金髪の若者シールは、ずっと入門してくる各国を見ていた。ちょうど、ルキボル国の入門を見ていたところで、オークランド王子1人だけの登場に驚いて出た言葉だった。

「いくらなんでもあれはないよね、狙われたら守ってくれる人いないもんね」

シールが誰に話すわけでもなく大きな声で喋っていた時、ガンツと後頭部に激痛が走った。

「痛、痛、痛、痛、い！！」

頭を抱えながらシールは振り返った。

そこには、赤い髪の女が仁王立ちしていた。

「こおら、シール、勝手にいなくなるな、あたしがどれだけ探したのかわかってるのか」

「わ・悪かったよ、カインド。でもさ、そんな強く殴るなんてさ」

「うつさい。あんたがどんだけ痛くてもあたしの足の方がよっぽど痛いよ、あんたを探すためにね、歩きまわったんだよ！」

カインドと呼ばれた赤髪の女は腰に両手を据えて、シールを睨み付けた。

シールも目を泳がせてカインドとは合わそうともせずに、拝むような格好で謝った。

「ごめんね、ごめんね、ごめんね」

…と舌をペロリと出す。

それを見たカインドは溜息をついた。シールはお調子者の性格な

のだが、憎めない。少なくともカインドにはそうだった。

「まあ、いい。とにかくあたし達は偵察だつてことを忘れないでよ」

「あいあゝい、わかつてまあゝす」

シールは敬礼の仕草をした。

「ドルコルド国、マルーン教皇の入門である」

遠くから門番であるサウザの大きな声が聞こえた。次の国の入門である。

「そら、あたし達の、あたしの国の、偉大なるマルーン教皇様が来られたわ」

赤髪をかきあげてカインドは嬉しそうに言った。

続けて、シールも拍手しながら騒いだ。

「わゝい、わゝい。マルーン様だゝ」

聖国ドルコルド。ゲルニア国、バリユアス国に続く、3島の1つの国である。

ガルド歴807年に建国。各国で内部紛争、国同士の戦争が勃発する中、常に中立を保っていた国。希望の国を通り名とし、世界の平和を願って現在に至る。

最高責任者は「王」ではなく「教皇」という名で、数回の代わりがあり、今はマルーンという30歳にもならない若者が就いていて、先代が退いたために、息子のマルーンが受け継いだことになる。1年前の出来事だ。

それにより、マルーンの周りも様変わりし、主に同年代の人間を近くに配置するということし、それが好みによつての取り決めとも思われ、国の内部では不満が上がってきている。実際当のマルーン教皇自身は何食わぬ顔で平然としている。

中立という方針を一度も覆すことなく継続している国ドルコルド。新たな指導者の下でいかなる方向性をみせていくのだろうか。

入門すべく、マルーン教皇を乗せた派手な馬車がゆっくりと向か

っていた。

「偵察はちゃんとしているのか？」

厳しそうな表情で、眼鏡をかけている女性が馬車の中から鋭く言った。白すぎる肌が薄っすらと光を帯びていた。マルーン教皇から2番目の地位に位置するロンシュタット。バリュアス国のルリードと同じく、生活管理をしている立場にある。だが、ルリードとは違うところがある。ロンシュタットはマルーン教皇の恋人でもある。

「はっ、シールとカインドが既に入っております。…連絡はありませんが」

馬車の後ろからついてきている黒い馬に乗っている男が答えた。

「そうか…わかった。下がってよいぞ、ブランチ」

それだけ言っているとロンシュタットは黙ってしまった。

「はっ」

頭を下げたブランチは黒い馬と共に静かに馬車の更に後ろへ速度を落とした。

横で聞いていた紫の衣に身を包んでいるマルーン教皇が優しい笑顔でロンシュタットの手を握った。

「気にするな、ロンシュ。あのシールとカインドの2人なら大丈夫だ、無事果たしてくれる」

「ええ…」

「責任感の強いお前のことだ、緊張するのはわかる。今回の会議は本当に重要なものだから。しかし、極端に自分を追い詰めるな、もっと気楽になれ、心配ない」

「ありがとうございます。マルーン」

ロンシュタットが頭を下げた。

マルーン教皇は笑みを浮かべた。

「ふふふ。希望の国ドルコルド…か」

なんとも不敵な笑みだった。

「このマルーンの代から…絶望の国…だな」

ドルコルド国の軍隊がゆつくりと門の下をくぐっていった。
それを見届けてから、カインドが軽くシールの頭を小突く。

「さ、いくよ、あたし達も行動開始だ。これからが忙しくなるよ」

「あいあい。楽しみだね。まずはどうすればいいの？」

「そうさね…まずは…ヴィジョンズに会いにいかうかね」

「あいあい」

金髪の男と赤髪の女は、神殿の方へ向けて歩き出した。

つづく。

第2部 第1章 各国集結 その4

「またガルド会議の年だな。ワシは嫌いなんだよな、あの会議が」
とても96歳には見えない老人が巧みに馬を操りながら、不満気に白い髭を擦って言った。

「だって、ワシ達がいつも白い目で見られるじゃないか。異教徒だということだ」

老人は更に続けた。元々が軽い話し方なのだろうか、年配の話し方ではない。

それを聞いて隣にいた黒い肌の若い男が口を挟んだ。

「異教徒という面では確かにそうかもしれませんが。しかし、陛下、今回は大丈夫です。ゲルニア国の消滅が議題ですから。我が国、ロクシー又は関係ありません」

「そうだといいがな」

溜息をついて老人はまた髭を擦った。

「おい、オルウェイ。先にいき、我らが来たことを知らせにゆけ」

黒肌の男は後ろの馬に乗っていた女に指示をした。

俯いていたオルウェイと呼ばれた女は、はっと顔をあげた。

「了解いたしました。タイラー將軍」

そう言うのと、オルウェイは馬を先に走らせた。腕に刻まれた絶望神の紋章が目立つ。

ほどなくして、門番の大きな声が響き渡ってきた。

「ロクシーヌ国、ドリムオン陛下の入門である」

異教徒の国ロクシーヌ。

世界のほとんどの人間は太陽の神アルニヴァースの信仰者である。各国含めてそれは変わらなかった。しかし、異変が起きた。絶望の神メンデルゴスを信仰する者が出てきたのだ。

事態は深刻になり、ガルド歴699年、アーガス国とニゴラス国の絶望神信者が手を組み、戦争を引き起こした。後に「異教徒戦争」と呼ばれるものである。

結果は、異教徒組の勝利におさまった。剣の国の異教徒。魔法の国の異教徒。今まで有り得なかった組み合わせが、絶大なる力を完成させたのだ。剣と魔法の融合。アーガスとニゴラスの2国は成す術なく敗れ去った。

その4年後。ガルド歴703年。ロクシーヌ国が誕生したのであった。

ロクシーヌ国の歴史は戦争ばかりだった。常に狙われる国。次々と誕生していく新たな国。異教徒というだけでそこからも狙われる。100年間は戦争だけの毎日であつたらう。

それに変化が訪れたのは、ガルド歴838年。ニゴラス国とロクシーヌ国の戦争。「ドリムオン作戦」が勃発した。

当時指揮官であつたドリムオンの全責任のもと始まった戦争。圧倒的な力でニゴラス国に大きな深手を負わせたのだ。

その強さに他国も引いたのか、その後は、小さい揉め事はあつたが、全く大きな戦争はなかった。ドリムオンが追い討ちをかけずに、勝敗が決まるとすぐ軍を撤退させたことも影響があるかもしれない。必然的にドリムオンが現在の陛下として、ロクシーヌ国を受け継いだ。それからドリムオン政権は代わらずに、現在まで至る。おかげで異教徒の国でありながら、なんとか生き延びてきているのだ。

といつても、異教徒という事実が変わることなく、ガルド会議の中でも、8國中1国だけ晒し者ような立場にあることに、ドリムオン陛下は気に入らなかった。

いつかは、解りあえる時が来るのを信じてドリムオンは残りの人生を過ごすことにしている。

ロクシーヌ国が通り過ぎたのを見届けて、マイズナが首の関節を

鳴らした。

「うつうゝん、あと2つだな、サウザ」

「うむ、ガシーベ国とニゴラス国だな」

サウザが言った。少し疲労感が窺える。

各国を見届けただけで仕事が終わったわけではない。まだまだ入門する商人や旅人が大勢いるのだ。

2人はうんざりとして空を見上げた。

バロゲニア神殿内。

大神官デスペラドが準備に忙しくしていた。

妻のピースフルがデスペラドの傍に近寄ってきた。

「そろそろ全部の国が集ります」

「そうか、特に問題は」

「ありません」

デスペラドは内心ほっとした。毎回、入門する時に国同士、もしくは見物人達との揉め事が必ずあったのだが、今年はそういった事の報告がない。それだけでも、幸先がいいと思う。

「息子達は」

デスペラドは探すように辺りを見回しながらピースフルに4人の息子達のことを聞いた。次期大神官候補である。

問われたピースフルはコクリと頷いてから思い出すように話した。

「ボーダーは各国滞在に際しての食事の確認をしているはずで。

ヴィジョンズは各国へ提出する議題をまとめています。リゾートは確か警備の確認を。そして…」

ピースフルは困った顔をした。

「…グリークスか」

デスペラドは溜息をついた。

「ええ。どこにいるのか…わかりません」

「困った奴だ。あいつには神殿の神聖なる神官という意識がないの

か。確かにグリークスは…」

何かを言いかけたのだが、部下の神官に呼ばれて、会話は止まった。

「とにかく、帰ってきたら、私の元へ」

「ええ、わかりました」

デスペラドとピースフルは別れ、また忙しく動き始めた。

門、入口。

突如、おおつと歓声が膨れ上がった。しかも喜んでいる声は男のものが大半であった。

「きたぞ、マイズナ」

「ああ、一番楽しみだったんだよね、女傑の国」
嬉しそうにマイズナが言った。

「ガシーベ国、マリークレール女王の入門である」

豪勢で大きな数台の神輿に担がれて登場したのは、女傑の国ガシーベの女王マリークレール。

ガシーベ国は女性が優位に立っている国であり、国を治めているのは女性で、男性の扱いは奴隷のような扱いであった。当然その神輿を担いでいるのは奴隷の男達である。

ガルド歴746年に建国されたこの国は初めのうちは男の政権であったが国王が早く亡くなってしまい、跡継ぎがないことから、女王が政権を握ることになった。

当時の女王がなかなかの貪欲な人間で、一度手に入れた政権を手放すようなことはしたくないと、次々と法律が改正していった。男性は奴隷並みの扱い。女性の意見は絶対的。もはや独裁に近い政治だった。

では子孫繁栄はどうなるのか。他国の男を引っ張り込んで結婚、

出産の繰り返しをしていた。

ここでも無茶な政治は発揮されていて、結婚すると、夫は必然的に奴隷の位置になる。産まれた子供が男であれば、奴隷。女であれば重宝されていた。

これでは男性も結婚をするはずはなく、子供だけ産ませて後は自分の国へ帰っていく。

そうになると、誰もガシーベ国の女性には見向きもしないだろうと思われがちなのだが、ガシーベ国の女性は絶世の美女が多かった。それは美食の国バリユアスに勝るとも劣らないであろう。

悲しい男の性なのか、一度はガシーベの女と……と、言い寄ってくる男は後を絶たない。女だけの国でやっていける理由はこれだ。常に受け身でも問題ないのだ。食料も衣服も宝石もなんでも男が貢いでくれる。

女傑の国、またの名を高飛車な国とも影で呼ばれている。

「ほほほ。我がガシーベ自慢の女達に、馬鹿な男どもは見とれているでしょうねえ。ほほほ」

神輿の中から、マリークレール女王の高笑いが聞こえてきた。

同じ中にいるデュバルドも話を合わせて一緒に笑った。

「ふふふ。そうですね。私達の永遠の美貌でこのガルド会議も女王が仕切ればいいのです」

「ほほほ。それはやりすぎつてものですよ、デュバルド。殿方の顔を立ててあげませんとねえ」

2人はますます大きな声で笑ったが、突然女王が真顔に戻った。

「それはそうと。各国の高名な殿方。彼らの子供を、勿論、女児だが、授かれば新たな優秀なる血を手に入れることができるんだけどねえ」

「しかし、彼らにはそれなりのお相手がいるのでは？」

「ほほほ。そんなことは関係ありません。我が国の美の虜にしてく

れましようぞ」「

「では…そのように…」

「頼むぞ、デユバルド」

怪しい思惑が神輿の中を渦巻いていた。

つづく。

第2部 第1章 各国集結 その5

女傑の国ガシーベ入門中。

マリークレール女王と側近のデュバルドの笑い声を聞きながら、別の神輿の中にいる女性3人はこの世の終わりのような溜息をついた。

「何を話しているのでしょうか」

キャリーが呟いた。

「ふん。どうせくだらないことだろうよ」

ミシエルが舌打ちをした。

「あたしたちには関係ないと思うけどね」

冷静にレイが言った。

ガシーベ国が女の国といっても、敵からのもしものために守らねばいけない。その国を守り抜いているのが、この3人の女性である。温厚であるが、剣の使い手キャリー。最も勝気な性格のミシエル、彼女の武器は己の肉体のみである。最後に後方で冷静に戦況を判断する魔法使いのレイ。この3人がガシーベ最強の3人衆と呼ばれている。

「それにしても、この悪趣味な神輿はなんとかならないのか」

うんざりするようにミシエルが言った。小麦色の肌が日差しを浴びて薄っすらと汗を滲ませた。他の2人よりも肌の露出は多い。元々が汗っかきなのだろう。キャリーとレイは平気のようだ。

黒色と黄色と、更には緑色で描かれた恐ろしく派手で怪しい色の神輿を触りながら、レイが言った。

「女王が派手好きなのはいつものことだ。悪い意味でだが」

「まさかここでも『悪い癖』が出ないかしらね」

心配そうにキャリーが頬に手をおいた。

「あの笑い声が案外その話じゃないのか」

ミシエルの言葉と同時に3人は後ろを振り向いた。

更にもう一つの神輿の中に、三つ編みをしている幼い少女が1人。
「リサ……」

ミシエルが悲しい声で呟いた。

「我々がどうやら最後ですね」

青い三角帽子を被ってる男が、遠い目をして、門を通過する派手な神輿を確認しながら言った。

「ガシーベ国も入門したか」

今度は続けて赤い帽子を被った男が言った。

「では、我らも入門するでしょう」

藍色帽子の男が言った。

それぞれ、黄、緑、紫、橙の三角帽子を被った男達が後に続いた。魔法の国ニゴラスの『虹帽子』と呼ばれる者達である。各々が決められた色の帽子を被っている。それは色にあつた魔法能力を持っているという意味ではない。確かに色と能力の組み合わせで被っている者もいるが、それは真の理由ではない。理由は他にある。

ニゴラス国の王はとても用心深すぎる男で、人前には出てくるような人物ではない。いかなる場合でも、国民でも、王の素顔を見た事がないのだ。名前も知らない。現状はニゴラス王と国名と同じ名前を名乗っている。

そんな王に合わせて作ったのが、この『虹帽子』である。虹色、7つの帽子、つまり7人の背丈も年齢も似た男が集っている。この7人の中に本当の王がいるのだ。

7人は当然ながら名乗ることを許されない。全員が『ニゴラス王』として扱われる。

この異常な方針の背景にはやはり各国との過去の戦争があるのだろう。それと最近のゲルニア国の滅亡、パール族の関与疑惑。ますます意固地に現われるはずがない。

兵も引き連れず、7人の色帽子を被った男達は門を通り過ぎてい

った。

「ニゴラス国、ニゴラス王の入門である」

サウザが最後の国名を高らかに叫んだ。

虹帽子達は足早に通っていった。やはり、人の目には極力触れないようにしているのだろう。いつ誰が王の顔を知ってるのかわからない。

マイズナは大きく息を吐き出した。ようやく全部の国の入門を確認したのである。

「ふう、やっと全部か」

その場に座り込みそうなマイズナをサウザが正した。

「マイズナ。他にも入門者はいる。気を抜くな。こういう時に怪しい輩に入られるのだぞ」

「わかりましたよ、サウザさま、ホント真面目だな」

呆れた口調でマイズナが言った。

しばらくは、当たり前前の日常、いつものように商人や旅人の確認に追われ始めた。先程の各国の入門で喝采だったとは思えない程落ち着いていた。

サウザはふつと並んでいる人の群れの奥を見た。

「…なんだ…アレは」

遠くからでもアレがはつきりとよく見える。アレは…剣。そんな物ではない。人よりも大きな剣。

「マイズナ。あそこを見る」

サウザの言葉に従ってマイズナは指差している方をみる。

「なんだありや」

背の高い白い髪 of 若者が、堂々と並んでいる。しかも大きな剣を背中にしよって。マイズナは驚きを隠せなかった。

よくよく見ると、白髪の男の後に3人の同じような若者がいて、更には、男の子が2人、女の子が1人の全部で7人という不思議な

組み合わせの団体だった。

緊張した面持ちでマイズナは話しかけた。

「えっと…あの…ここから先は武器の持ち込みは禁止なのだが」
それを聞いて、傍にいた男の子がマイズナに言い寄ってきた。その瞳には怒りが見える。

「なんだよっそれ！さっきの兵士とか持って入ってたじゃんか」

「あれは、国の王を守るために特別に許可してるんだよ、ぼく」

「僕達だって、守るためにここまできたんだぞ」

男の子の勢いではなく、しっかりとした決意の思いをマイズナは少なからずとも感じ取れた。興味本位で聞いてみようと思った。

「へへ、ぼくは何を守るのかな？」

「世界」

間髪入れずに男の子が言った。

「は…？」

同時に1人の若者のゲンコツが男の子の頭に炸裂した。

「いた〜！なにすんだよ、オキユラスさん！」

「馬鹿か、ボズ、お前な、そんな訳のわからないことをだな」

言い争っている大人と子供の間から、物静かな男が口を開いた。

「どうあっても武器は持って入れません。私が預かって、外で待機しておきましょう。門の外でもテント程度の宿泊はできますから」

話のわかる人だとマイズナは内心胸を撫で下ろした。物静かな男は続ける。

「ですから、ファミリストン將軍とハツシユはどうぞ、中へ。私とオキユラス、子供達は外で」

「…將軍？」

誰にも聞こえなかったが、マイズナは声に出した。どこの？どの国の？妄想なのだろうか。この団体が非常に怪しく見えてきた。

「ええ〜嫌だ、嫌だ〜中に入る〜」

ボズが大きな声で叫び始めた、隣では言い合いしていたオキユラスも同じように、嫌だと叫んでいた。

將軍と呼ばれていた男が笑いながら言った。

「まあ、エグリアースいいじゃないか、お前には申し訳ないが、オキュラスもボズも中に入るとしよう。ステューとアリシエはエグリアースと一緒に外で待っていてくれ」

女の子のアリシエともう1人の男の子のステューは無言で頷いた。マイズナはぎょっとした。衣で隠しているが、ステューの片腕が無いのが見えたからだ。ますます不安になる。

「では、入門するでしょう」

剣を外して、3人の男と1人の子供は門を通過していった。

その姿を後ろから見届けたマイズナの不安は並んでいる見物人達の確認により、忙しく、あっという間に忘れ去られた。

＼ 第1章 各国集結 終 ＼ 第2章につづく

第5回 こぼれ話

皆さんいつも読んでくれてありがとうございます。
読んでない人も来てくれてありがとうございます。

お久しぶりです。

色々と助言を頂き感謝しています。

さて。

始めました。

第2部です。

まずは最初に謝っておきます。

僕の文章力のなさで、わかりにくくなっていると思います。

物凄い人数の登場人物出しました。

第2部に関してはもう少し新キャラ登場しますが、基本的にはこの第1章で出てきた人物で話は進みます。

これからもこの人物が中心となって進んでいきます。

別サイト「教えて！七英雄物語」でもどんどん更新していきますので、詳しい内容はここを見てください。

では恒例の作者がわかるために、第1章で出てきた人物の簡単なまとめをここに書きます。

第1部からの継続

ルシア

物語の主人公

ハッシュ

白い髪

ファミリストン

元ゲルニア將軍

エグリアース	物静かな元ゲルニア
オキュラス	お調子者の元ゲルニア
ボズ	一番威勢のいい男の子
アリシエ	言葉をなくした女の子
ステュー	片腕のないパール族の男の子
クラシェイカ	元伝説剣士

バロゲニア神殿

デスペラド	大神官
ピースフル	その妻
ボーダー	長男
ヴィジョンズ	次男
リゾート	3男
グリークス	4男
マイズナ	門番
サウザ	門番

剣の国アーガス

ダニエル	王
ジューダス	鷹の三騎士
スノー	鷹の三騎士
ジェイミー	鷹の三騎士

美食の国 バリュアス

ブロウフィッシュ	王
ルリード	側近
ムトウ	部下

医療の国 ルキボル

オークランド	王子
--------	----

ストラング オークランドの愛馬

希望の国 ドルコルド

マルーン 教皇

ロンシュタット 側近、マルーン教皇の恋人

ブランチ 部下

シール 偵察

カインド 偵察

異教徒の国 ロクシーヌ

ドリームオン 王

タイラー 將軍

オルウェイ 部下

女傑の国 ガシーベ

マリークレール 女王

デュバルド 側近

キャリー 3人衆

ミシエル 3人衆

レイ 3人衆

リサ 少女

魔法の国 ニゴラス

ニゴラス（仮名） 王

虹帽子 赤、青、藍、紫、黄、緑、橙の帽子を被っている男達。

この中に本物の王がいる。

だいたい以上です。

これからもっともつと増えます。

とりあえずは、これで進みます。

一切活躍せずに終わる人もいれば、大活躍する人もいます。

おおっと、当の主役のルシアはなにしてるのですか？

アーガス国でクラシェイカと暮らしてます。

…まだ活躍しません。

でも！でもね！次回は…何とか…多分…。

最後に最大の謎掛けを。

上記の登場人物。

この中に7人の英雄、七英雄が全っています。
いったい誰でしょうか。

良かったら予想してみてください。

それでは第2章もお楽しみください。

第2部 第2章 賑やかな町グレン その1

門を抜けたらグレンという名の町があり、更に先がフライという名称の宿泊施設がある。

フライには各国の重役達が寝泊りをし、その他の兵や、側近ではない者、身分の低い者はグレンに留まり、会議が終わるまで待機になる。

文化も思想も違う国同士である、とりわけこういった時にイザコザが起るものである。

過去のガルド会議にもそういったことはよくあった。本気になり、死んだ殺したとなるってしまうと戦争になるのは当たり前で、皆馬鹿ではない、さすがにそこまでには至らないが、今年に限っては少しだけ大人しい。

ハッシュやファミリストン、オキュラス、ボズの4人が入門した時には、町の全ての宿は満員となっていた。

「うわゝ、とても賑やかなところですね」

オキュラスが驚いて言った。故郷ゲルニア国では決して見ることでできない風景。商人が所構わず店を開き、旅人達がそれを品定めする。飲食店は主人が休む暇なく料理を作り続けている。このお祭り騒ぎは夜になっても終わることがないだろう。少なくともガルド会議が終わるまでは。

「それよりも、まずは、泊まるところだな」

ハッシュが辺りを見回すが、空き部屋があるような所は見つからない。

ゲルニア国から船で海に出た後、ハッシュの師であるクラシェイカの元へ行く前に、もう一つ寄るべき場所があるとハッシュは皆に説明した。

それが、このガルド会議の会場、バロゲニア神殿だった。理由は新たな英雄がここにいるというクラシェイカの予言だったからだ。

「それにしても、いるのか？ここに、その、英雄ってのが」

疑り深い表情でオキュラスが言った。

「師クラシェイカは間違いない」

ハッシュは静かに力強く言った。

「そうか、じゃあ後3人だな」

「…」

「…」

「…」

オキュラスの発言に残りの3人は黙り込んだ。あまりにも突然の言葉にどう対応していいのか判断がつかないようだった。

ハッシュはそのまま宿を探すために辺りを見始め、ファミリストンは苦笑している。ボズが思い切ってオキュラスに問う。

「あの…後3人…って？」

「え？何言ってるんだよ、ボズ。7人の英雄だろ、ハッシュとファミリストン将軍とエグリアースさんと、俺で4人だろ、これで後3人じゃあないか」

「…」

真剣な顔で言われたボズは何も言い返すことは出来なかった。『エグリアースさんはともかくオキュラスさんは…』とは口が裂けても言えない。

ふと、通りで人が集っているのをオキュラスは見た。

「おい、ボズ、あそこ見てみようぜ」

「え？ちよっ…ちよっ…でも」

「ファミリストン将軍！いいですよね」

オキュラスは子供ように叫んだ。将軍と呼ばれたことに焦りを感じながらファミリストンは許可の意味で頷いた。ハッシュは呆れた顔をしていた。

「よし、いこうぜ」

困るボズの手を引いてオキュラスは人の群れに向かって行った。

そこは喧嘩の場だった。旅人と町人が口論になり、お互い手を出し始めたのだ。よくあることだが、他所から来た人間に冷たい者もいる。どっちに非があるのかはわからないが、お互いの態度に頭にきているのだろう。

「なんだ、喧嘩か」

オキュラスは残念そうに言った。帰ろうとするオキュラスをボズが止めた。

「何言ってるんだよ、オキュラスさん。早く止めるんだよ」

面倒臭そうにして、行動に移さないオキュラスの横を1人の男が横切った。男は無精ヒゲを生やし、鷹の鎧を装備していた。

瞬く間に周りの野次馬が騒ぎ出した。

「おい、あれ、アーガス国鷹の三騎士、スノーだ」

鷹の三騎士ほどの身分であれば、当然宿泊施設フライに行くべきなのだが、町の様子を見るということで、スノーだけがグレンでの待機となった。後の2人、ジューダスとジェイミーはダニエル王を守るべく、フライにいる。

何かあったときに素早く王を脱出させるための逃走経路を確認していたのだ。その途中にこの喧嘩に出くわした。

スノーはためらうことなく喧嘩の中に割って入った。

「ここは神聖なるバロゲニア神殿の町であろっ、こんな喧嘩などでその神聖な場を汚すでない」

ほのかに酒の匂いを出している喧嘩をしていた2人は、いきなり標的をスノーに替えた。

「なに格好つけて偉そうなことやってやがんだ」

「そうだ、そうだ、そんなこと言うのなら、てめえは勿論喧嘩なんかしないだろうな、ええ、おい、こういうことされてもよお」

男はスノーに殴りかかった。男の拳はスノーの顔に当たり、口元

から少し血が滲んだ。

スノーは血を拭い、無精ヒゲを触りながら、何食わぬ表情をしている。

「こつこの野郎！」

間違いなく酔ってなければこんな命知らずなことをするはずがないが、この男2人は酒の勢いで何もわからなくなっていた。酔いが冷めて気づくのであるうか、あの鷹の三騎士を殴ったという事の重大さに。

男2人は何度もスノーを殴りつけた。見るに見かねて周りの人々が止めようとした。

…が。

「構わん！好きにやらせろ」

スノーが一喝した。人々の動きが止まる。その一喝で殴っていた男2人も止まった。

それを確認してから、スノーは2人を見据えて言った。

「気が済んだか？」

その言葉は重く、その場に居合わせた全員の心臓を驚摑；みするほどの威圧感があった。

「…」

何も答えられないでいる男2人にスノーは大きく息を吸って。

「済んだのならば、去れい！」

再度一喝。ビクツと身体を震わせた2人は逃げるように消えた。

「諸君、ご迷惑をお掛けした、さあ、祭りを楽しむがよい」

そう言ってスノーは何事もなく歩き出した。

おおくと歓声と拍手がスノーに贈られた。傷の手当てをしようとして、数人の町人が後を付いていく。

「いやあ、さすが、鷹の三騎士だな、器が違うよ、器が」

口々に賞賛の言葉が出てくる。

一部始終を見ていたボズは、白い目でオキュラスを見た。

「なっ、なんだよ、俺が今から止めようと思った時にだな…」

恥ずかしそうに言うオキュラスの言い訳をボズは無表情で聞いていた。

「…オキュラスさん…英雄じゃないと思う」

「！」

ボズのキツイ一言にオキュラスはがっくりとうな垂れた。

つづく

第2部 第2章 賑やかな町グレン その2

オキュラスがボズにキツイ一言をもらっていた頃、ハツシュとファミリストンは宿を確保するために、あちこちを歩き回っていた。それでもまだ宿は見つからない。

「聞きたかったのだが…」

おもむろにファミリストンがハツシュに話し掛けてきた。

「ん、なんだ？」

「7人の英雄のことだ」

「ああ…」

「どうして、俺を選んだのだ」

ファミリストンの頭から離れることのできない疑問。どうして、ハツシュは自分を指名したのか。

数ヶ月前のゲルニア国の出来事はハツシュが解決したようなもので、ファミリストンは英雄という名に相応しい何かをしたのかと問われれば、答えは否である。傷つき戦闘場所へ辿り着いた時には勝負は決していた。最後に主であるセラミス王の止めを刺したただけである。

いつかハツシュに聞いてみようと思っていたことだった。こういう問題は周りの誰かに聞かせるような内容ではないと思っていた。自分が選ばれたことに疑問を感じているなどとはエグリアースやオキュラスが不安になるのではないだろうか。2人だけになったからこそ、口に出せたのだ。

ハツシュは考える間もなく答えた。

「そう思ったからだ。他に理由などない。ゲルニア国の生き残りを見て英雄に相応しいのはと感じたからだ」

これ以上追求出来ない返事だった。単純かつ明快。いい加減だと言いかけたが、ファミリストンは黙った。

『そう思った』それが不満ならば、それが真実になるように努力す

ればいい。ファミリストーンは少し微笑んだ。国を出てから何かを目的としたことがなかった。今、それが見つかった。英雄になるまで納得いくように努力していくのだ。ファミリストーンは密かに誓い、宿探しを再開した。

ハツシュの不注意だったのかもしれない。

キョロキョロと見回していたため、前方から向かってくる者に気づかなかった。

ドンツ。

ハツシュとぶつかった女性はその場に倒れ込んだ。体格の差なのだろうが、ハツシュの方はなんともない。

「あつ、すまない、大丈夫か」

ハツシュは長い黒髪の大人数のような女性を立たせようと手を差し伸べた。綺麗な白い肌は吸い込まれそうなほど美しい。

「いえ、私も他を見ていたので…」

女性は恥ずかしそうに言った。

「待て」

突如女性の後ろから声が響いた。小麦色の肌をして、身に着けている服よりもその肌の露出の方多いのではないかと目を疑うほど派手な服を着ているもう1人の女性が駆け寄ってきた。

「その気持ちのない謝り方はなんだ」

「ちよっ…やめなさい、ミシエル」

「いいや、やめない、だいたいアンタは優しすぎるんだ、キャリー。ここはキレてもいい場面だぞ」

キャリーは困ったというような顔をして、怒っているミシエルをなだめている。

ミシエルの怒りはおさまらない。

「本当に謝るっていうのはね、頭を地面まで擦り付けることなんだよ。簡単な言葉で済ませるな」

そこまで目の仇のように言われたいいけないことなのかとハツシュは驚いた。お互い余所見をしていて、お互いがぶつかっただけなのだが、ミシエルの言い分はハツシュが全面的に悪いような言い方だ。『男』というものに嫌悪感があると思えない。

周りの人達が騒ぎ始めた。

「おい、あの女達…ガシーベ国の…」

「そうだ、確か…ミシエルとキャリーだ」

ハツシュはミシエル達の顔をじつと見た。どうやら人々の声から察するに有名な女性らしい。女傑の国ガシーベ。女性優位の国だからこそ、男への敵対心も強いのだろうか。

「と…とにかくすまなかったな。ハツシュ、ほら…」

ファミリストンが慌てて間に入った。問題に発展するわけではないが、ゲルニアの件も含めてあまり目立つようなことはしたくない。特に相手は会議のために滞在してきた国の人間である。幸いファミリストンは過去のガルド会議に出席したことがないため、顔を知られるという事態はない。

ミシエルの怒りは男が相手だからというわけではなかった。宿泊施設フライへ連れて行かれずに、キャリーと一緒にこの町での待機を命令されたからだ。キャリー自身はそこまで考えていないが、ミシエルはこの待機という命令を信頼されていないと思ったようで、怒りは増してイライラしていたところにハツシュとキャリーがぶつかったのを目撃することとなった。

ハツシュは、ファミリストンの気持ちを察して、この場を離れるようにと目で訴えた。ファミリストンは心配そうにゆっくりとその場を離れていった。

続いて、ハツシュも離れるつもりだったが、どうしても一言いわないと我慢ならなくなり、ミシエルの方へ向き直った。

「土下座をする気はない。お互いがぶつかったので、お互いが謝罪しただけだ」

ミシエルの顔色が変わった。

「駄目よ、ミシエル。ここでは、駄目」

青ざめた表情でキャリーが止めに入る。

「それにあの人の言う通りよ、お互いの不注意よ」

「いいや、キャリーは悪くない。あの白い髪の奴1人のせいだ」

もはや聞く耳を持ち合わせていないミシエルをどんなにキャリーが制しても止まるはずはなかった。

「キャリー、アンタは宿に帰れ、国は関係ない、あたし自身の喧嘩だ」

「ミシエル……」

言い出したらもう覆すことはない。キャリーは諦めて、背を向け帰り始めた。遠くから2人の動向を見るために一時離れるつもりだった。

「あんだ、名前は？」

「……ハツシュ」

「そう、ハツシュ、あんだが土下座するまで、あんだを殴り続けるぞ」

ミシエルは構えた。

ハツシュの目に凄まじいオーラが見えた。差別するわけではないが、女性の出すオーラではない。ガシーベ国の相当な戦士なのだろう。それでも、ハツシュは言いかかりには納得できない。事実、ミシエルの機嫌が悪かったのが大きな原因である。

ミシエル自身も冷静に考えれば理解できるはずなのだが、感情が先走って、もうその判断が出来なくなっていた。

武器をもっていないハツシュと全身武器のミシエル。町人の予想は完全にミシエルの圧倒的な勝利と思っていた。遠くで見ているキャリーでさえ。

「はあっ」

気合。数々の男達を倒してきたミシエルの拳は、ハツシュの力強い腕で受けられた。

「……」

ミシェルは驚きと共に、久しぶりの骨のある男の出現を喜んだ。

つづく

第2部 第2章 賑やかな町グレン その3

グレンに取り残されたロクシー又国のオルウェイは、外に出るにとすら嫌だったが、何かあった時のために、町の把握を命令されていたため、否が応でも外出せざるを得なかった。

オルウェイの外に出たくない理由は、ただ一つ。異教徒という周りの白い目だった。

異教徒の国に産まれたオルウェイは、絶望神を崇めることに何の不満も不安もなかった。が、ロクシー又国の歴史を知るにつれ、段々と成長していくにつれ、そして、ドリムオン陛下の下で働くにつれ、自分の国がいかなる立場に位置するのかが理解できた。

絶望神への気持ちは揺らぐことはない。揺らぐことはないが、女性であるオルウェイにとつて、身体を舐めるように見回され、軽蔑の眼差しで見られることは耐え難いことであつた。

本来であれば、会議が終わるまでは外出などしたくはないが、命令であれば仕方ない。

腕の紋章が絶望神を崇めていることを認める証拠。

「おい…あれ…」「ああ…ロクシー又国の女だ」「絶望神なんかを…ねえ…」「信じられないよ」

方々から聞こえる冷たい声にグツと我慢をし、町の見回りも早々に切り上げようとした時、町の奥に人々が集って行くのが見えた。

大道芸でもやっているのかと、気にもせず宿へ戻ろうとしたオルウェイの耳に入ってきた町人の言葉。

「おい、喧嘩だぞ」「白い髪の男と、なんでもガシーベ国の女がやり合つてよ」「おもしろそうだ、行こう、行こう」

「えっ？」

思わずオルウェイは振り返った。

まさか、今回の会議に出席している国の誰かが喧嘩をするなんて。しかも何処の国かわかるほどの有名な人。これは大問題になる。止

めなければ。オルウェイは町人を一緒にその場へと走り出した。

「あんだ…ええと、ハッシュって言ったね」

最初の拳をハッシュにいと簡単に受けられたミシエルは素早く後ろへ下がって、思い出すように言った。

「なかなかやるじゃないか、素人じゃないね、どこの国のモンだ」

「…国を言えというのなら、生まれはアーガス。だが、国の戦士とは全く関係ない。俺は国からは認めてもらってないのだな」

そう答えながら、ハッシュは気づかれないように、拳を受けた右腕を軽く触る。痛みが身体に反応した。恐ろしく重い一撃だった。右腕がまだ痺れている。

「そう…それはもったいないね、あんだのような男が認められないんだ」

悲しそうにミシエルは言った。本音である。ミシエルは自分の力を必要以上に信頼している。先程の拳にも絶対的な自信があった。その拳を受け止めたハッシュの実力はそれだけで高いものと感じたのだ。まして、素手での戦いが本業ではない、アーガス国ならば、剣士のはず。

「さあ、ハッシュ、今度はあんだの攻撃だ。かかってこい」

ミシエルは自信満々に構えた。

ハッシュはゆっくりと近づきながら、構えに入る。大きく息を吐き、手に力を入れ、ぎゅっと握る。

周りはいつの間にか静かになっていった。人々も固唾を吞んで見入っている。

「では、いくぞ」

「こい」

ハッシュが踏み込んで仕掛けようとした瞬間。

「待てい！」

高らかに別の男の声が制止した。

服から溢れ出るほどの岩のようにも見える頑丈な肉体、四角顔の真面目で堅そうな男がハツシュとミシエルの前に現われた。

「…なんだあんた、邪魔をするな」

強気な目でミシエルが四角顔の男を睨んだ。

「いやいや、邪魔するでしょう。だって、君はガシーベ国の人間でしょう？いかなる場合でも問題は駄目だよ、特に喧嘩なんて…」

「うるさい、あんたは何者だ」

「…バリュアス国の勇者、ムトウ。同じ会議に出る国として忠告する。その喧嘩それ以上続けることは止めるんだ、ここでの問題は国のためにならん」

大きく振りかぶって、ミシエルを指差すムトウに冷ややかな視線を送る。一方ハツシュもやる気を突然削がれたことになってしまいびつくりした表情だ。

「ムトウ、あんたには関係ない、あたしはあくまでも一個人として喧嘩をしているんだ」

「それは君の意見であって世間は違う。君がガシーベ国のミシエルだということは全員知っているんだぞ。例えば国は関係ないと言っても、君はガシーベ代表している1人なんだ」

ミシエルは黙った。頭の中は、女王のことを、国のことを、会議のことを考えているのだろう。

「…ふん、わかったよ」

普段の彼女であれば言い出したら聞かない性格で考えを覆すことは困難なのだが、やはり今回の会議のことが重要事項だった。キャリーが止めても止まらなくらいに頭に血が上っていた。けれど他国の人間まで巻き込んで、更には周りの野次馬の目も多くなり、ムトウの進言で冷静に考え直すことができた。

「次に会う時は、決着をつけるぞ、ハツシュ」

ミシエルは構えを解き、ハツシュへの厳しい視線は崩さずに、踵を返して歩き出した。

見守っていたキャリーが何処からともなく現われて、心配そうに

ミシエルに話しかけた。

「大丈夫？ミシエル。それにしても大事にならなくて良かった」

「平気さキヤリー。今日のところは見逃してやる。それだけだよ」

2人はそのまま宿へと帰っていった。

不完全燃焼の野次馬達がその場をバラバラと離れていく中、ハッシュもどことなくやり切れない思いだったが、気持ちを落ち着かせて宿探しを再開しようとした。その前にファミリストンを探さなければいけなかった。

「その白いの」

後ろから、先程のムトウが話しかけてきた。

呼ばれ方にムツとして、ハッシュは振り向く。

「まあ、そういうわけだから。あんまり変な事を起こすなよ。それに命拾いしたぞ、彼女はガシーベ国でも1・2を争う戦士で有名だ。あんなに美人なのにな」

気にもしない風にムトウはハッシュに笑顔で話すだけ話して「それじゃあ」と消えていった。

建物の陰に隠れて様子を窺っていたオルウェイは、ミシエルとハッシュ、途中乱入のムトウがそれぞれ別方向へ離れていくのを見て内心ほつとしていた。

自分から進んで争うことが好きではないオルウェイだが、いざ対決が始まった時には止めるしかないお腹を括っていた。

オルウェイは左の手に赤く燃える炎の塊を静かに消し去った。

魔法使いである彼女は、もしもの時、その炎をミシエルとハッシュの足元に投げつけ、喧嘩を止めるつもりだったのだ。

オルウェイは魔法を使わずに済んだことに心の中で安心しながら、人目つかないようその場から消えるように離れていった。

つづく

第2部 第2章 賑やかな町グレン その4

先程のハッシュとミシエルの喧嘩騒動で野次馬達が溢れていた場所是谁もいなくなり静かになっていた。一つ先ではまだまだ元気な商人が騒いでいる。

その場所で誰かを待っているように佇む男が1人。男の目は白く濁っていた。盲目なのだ。杖を片手にじっと動かずに立っている。

盲目の男の後ろで物音が聞こえた。ピクツと反応する。

「ああ、トキングだ。待ったあゝ？」

馴れ馴れしい男の声。金髪のその男はトキングと呼んだ盲目の男の前を何度も嬉しそうに跳ねている。

トキングは不機嫌そうに杖を振り回した。

「遅いぞ、シール。一体どれだけ待たせる気だ。カインド、お前がいながらどういうことだ」

金髪の男シールの後ろから赤髪の女カインドが現われた。

「すまない、トキング。このシールの馬鹿が色々と寄り道をしてな」

「えゝ、僕お馬鹿じゃないもゝん」

「うつさい、あんたはややこしくなるから黙ってな」

うるさいシールの口を閉じさせてカインドはトキングの方へ向き直った。

それを見えないなりにも雰囲気ですわったトキングが話し出した。

「…で。首尾は？」

「大丈夫。順調だ」

「ではロンシュタット様には…」

「問題ないと伝えてもらって結構」

「わかった。お前達とは連絡がとれなかったからな、報告が聞きたかった」

それだけ話すと、トキングは杖を使いながら歩き出した。

「引き続き、頼む。失敗は許されない。マールン教皇のためにも。」

そして、我が国ドルコルドの未来のために」

「わかつてる、心配無用だ」

「あいあゝい」

トキングは静かに歩いて行つた。

気を取り直して、シールとカインドも歩き出した。

「ねえ、ねえ、カインド、計画通りにいくかな？」

「当たり前だ。いくに決まつてる」

緊張感のないシールの言葉にカインドは苛立たしく言つた。

「そのためにはあたし達の役目は重要だぞ、とにかく神殿に行つて、ヴィジョンズに会う。まずはそこからだ」

「あいあゝい」

杖を使い、ゆっくりと歩いているトキングに妙な数人が取り囲んだ。今回の祭りに紛れ込んだ男達で、目の見えないトキングを力モにして強盗するつもりなのだ。

「なあ、おっさんよ、金持つてるか？あるなら出せよ」

「目が見えねえんだから、使いようがねえだろ？俺らが有効に使つてやんよ」

馬鹿にしたように下品な笑い声が響く。服には返り血がついている。どうやら、あちこちで強盗し、人を傷つけているようだ。

トキングは溜息をついて言つた。

「金は渡せぬが、代わりに面白い情報を教えよう」

男達は顔を見合わせ聞くだけ聞いて金を奪えばいいと思い、その情報を聞くことにした。

「なんだよ、その情報って」

「今回のガルド会議の最中にな、ある人物が殺される」

困惑した表情で男達はその盲目の男を見る。何を言ってるんだ？

「……は？誰だよ、その殺される奴って」

「……大神官……デスペラド」

そう言々とトキングは杖を振り上げて素早く弧を描くように振り回した。

「その前に」

男達の顔が青ざめる。呼吸が苦しくなる。喉が焼けるように熱い。唾を飲み込むと一緒に血の味がした。よく見ると杖が奇妙に光っている。その光は剣の刃からであった。

「お前達が死ぬのだが」

トキングは杖を戻すと何事もなく歩き出した。男達の首と胴体が離れて同時にバタバタと倒れていく光景を背にして。

夜は更けてもグレンの祭りは継続する。

賑やかさは変わらずに、ますます増加していった。

5年に1度のガルド会議。あと少しで始まる。

「オルウェイ」

異教徒だという白い目を受けながら見回りを済ませて帰ろうとしていた彼女を呼び止めた声が後ろから聞こえた。

そこには、同じロクシー又国でオルウェイと一緒にこの町に残ることになったソルティだった。

「ソルティ、いたのですか」

「ああ、そっちは終わったか？」

見回りのことである。2人で区分けして調査していたようだ。

「ええ、終わったわ」

「そうか、じゃあ、帰ろう」

2人は人目に触れないように歩いて宿に戻っていった。

「今年は何事もなく終わりそうだな」

ソルティが話し出した。

「前は…そうか、オルウェイは知らないのだな。前は大変だったんだぞ」

自慢するような口調でソルティは言った。この男は人の体験談を

まるで自分のように話してしまう悪い癖がある。

「その時の会議は特に議題をする内容もなかったので、急に我らの批判が始まってな、ドリムオン陛下は疲れておられたよ。その話を止めさせるのに、ホント大変だった」

事實は、ソルティはその場にはいなかった。今回同様に見回り役だったのだ。しかし、その場に居合わせた者達の話聞き、あたかも自分も現場にいたように話しているのだ。このソルティの癖は誰でも知っていることで、オルウェイも事實は承知の上なのだが、わざわざ驚いたり感心したりと調子を合わせている。

「今回はそういうことはないだろうよ。議題の中心はゲルニア国滅亡だ。我が国は一切関与していない」

「そうなれば、責任の所存はどこへいくのでしょうか？」

オルウェイの質問に、ソルティは胸を張って答えた。恐らくこれも誰かの受け売りなのだろう。

「もちろん、ニゴラス国さ。なんでも滅ぼしたのはパール族だという噂だし。パール族といえばニゴラス国。言及されるのは間違いがない」

気分良くソルティは答えている。

だが急に声を潜めてオルウェイに顔を近づけた。

「でもな、俺には裏にまだ何かあると思うんだ。大きな声では言えないがね。別の国が関わっているとかね」

どう答えていいかわからずオルウェイは何も言わなかった。

自己満足のようになり一人で頷きながらソルティは足早に歩き出した。その後ろをオルウェイが追いかけていった。

武器を持っている者は、門をくぐってグレンに入ることは出来ない。そういう者は近くで待機してないといけないのだ。

多く人数がここで足止めをくっていた。

奇妙な男は、この場所にいた。

ナリは普通の男、身長もさほど大きくない。特に見た目の特徴はない。

しかし、奇妙なのだ。

ずっと座禅を組み、全く動かないのだ。そして呪文のようなものを唱えている。聞いた事のない言葉。周りの人間は気味悪がつて近づかない。なので余計に目立つ。

話しかける者は誰もいない。まして、話しかけても返事はない。

その様子を、待機していたエグリアースはじっと見ていた。ステューとアリシエは既に熟睡している。

害はない。何かをやらかすようにも見えない。

だが、奇妙なのだ。

エグリアースは不安を抱きつつ、この奇妙な男から目を離さないようにと気配った。

く 第2章 賑やかな町グレン 終 く 第3章につづく

第2部 第3章 沈黙の施設フライ その1

賑やかに騒ぐ町グレンから一転、奥の宿泊施設フライは気味が悪いくらいに静かであった。それもそうだ。ここに泊まる者はほとんどが各国の王であり、その側近だ。来るべき会議のために緊張もしているだろう。騒いでいられないのが本音であり、一緒になって騒いでいるとなめられるというのも戦略としてある。

フライという施設は10階建の大きな建物で、各1階毎に国が泊まっているということになっている。今回は到着順で7階から1階までに決められた。

7階がアーガス国。6階バリユアス国。5階ルキボル国。4階がドルコルド国。3階にロクシーヌ。2階ガシーベ国。最後1階がニコラス国となっている。

各階の部屋割りは、その国が勝手に配置する。

そして、何かの伝達があるときは、フライ入り口で監視門番が書面を受け取り、中身を確かめることなく渡される。

日は落ち、また昇り、会議までの時間が刻一刻と過ぎていく。

5階ルキボル国。

そうはいつても、ルキボル国はオークランド王子ただ1人の出席なので、部屋も1つだけで十分である。

愛馬ストラングを部屋に入れようとしたのだが、さすがにそれは許可が下りず、ストラングは納屋で主人の帰りを待っている。

部屋に閉じこもったままのオークランドは寝台に寝そべったまま、死んだ父王に手渡された手紙を取り出し、じっと見つめていた。

封は開けてはいない。どんなに見つめても目の中に入るのは白い表紙だけである。光に当てるとうつすらと中身の手紙が見える。そこに全て書かれているのだろう。文字までは読めない。

死の直前に渡された手紙。それは何を意味しているのか誰にでもわかる。この手紙は遺言状。つまりはルキボル国の跡継ぎの指示をしている手紙なのだ。

どうして手渡したのか。

今のオークランドには考える時間は余るほどあった。

父王が死んだら、葬儀が行われ、遺言状を公開し、オークランドを含む3人の王子の誰かが、新しい次世代の王となる。ただそれだけだ。こんなにも簡単なことだ。

問題は『なぜこんな簡単な手順を踏まないのか』『なぜオークランドに渡すようなことをしたのか』

オークランドが思ったことは、『手渡すことの出来る信頼する配下がいなかった』のではないか。

偽造される疑いがあつたために、父王は唯一危険性の少ない王子、オークランドに手紙を託したのだ。

「いや…」

オークランドは呟いた。

「違う。また何かある。なぜ、僕に渡したのだ」

何度も何度も繰り返し返した自問。そして、それに対しての答えは既に出ている。オークランド自身がそれを受け入れることができないのだ。

もしその手紙に後継者のことが書かれているのであれば、後継者選ばれなかった者の手に渡ったのであれば、偽造される。

そうなる前に、『本当に後継者となる者』へ渡せば、偽造されることがない。

3人の王子の中で、オークランドを後継者と記された遺言状。

「そんな…」

信じられないとオークランドは言った。

半信半疑な思いがある。あるのなら封を開ければいいのだ。だが、内容を読む勇気もない。本当にその内容だった場合、自分自身を認めることができない。王になどなれない。オークランドは頭を抱え

た。

今はただ、静かにこの独りの時間を過ごしたい。
オークランドの束の間の願いを時は黙って受け入れた。

1階ニゴラス国

虹帽子と呼ばれる7人の男達は、7つの部屋を用意され、待機をしている。

それぞれが、青、赤、黄、緑、紫、橙、藍という虹の7色の帽子を被っている。

この7人の内の1人がニゴラス国の王なのだが、用心深いために、堂々と影武者を、それも6人用意しているのだ。背丈も身体つきも年齢もほとんど同じである。顔もよく見れば区別はつくが、いきなり7人を見比べるとまず戸惑うだろう。

この時間はちょうど、7人の虹帽子全員が同じ部屋に集り、ガルド会議のための話し合いをしていた。

黄色帽子の男が怒ったように言った。

「全く、パール族もやってくれたものだ。勝手な行動のせいで、我々まで迷惑することになったぞ」

何か独自の情報でもあったのだろうか、虹帽子達は今回のゲルニア国滅亡はパール族の仕業だと決めてかかっている。

考え込みながら青色帽子の男が喋った。

「ですが、本当に今回の件は知らなかったのですか？パール族のゲルニア国襲撃は」

周りを確かめるように青色帽子を見た。

「当たり前だ。特に俺らは何にも聞いてねえ。ここにいる7人全員な」

一気に早口でまくしたてたのは橙色帽子の男。

「確かに我らは知らなかった。配下の者も知らないはずだ。だが、仮に知ってたとしても、我らは知らぬ存ぜぬで通すしか道はないが

な」

藍色帽子の男が自分で言いながら納得するように言う。

「それしか…まあ…道はないだろうな」

賛成の意見を赤色帽子が言った。

「知らないで言い張るしかありませんね、事実、僕達は本当に知らなかったのですから。もし関与したという証拠突きつけられても、問題は無いでしょう」

そう言いながら、緑色帽子の男は紫帽子の男に話しかけた。

「貴方はどう思いますか？」

紫帽子は、顔を少し上げて面倒臭そうに答えた。

「ん…基本的には皆と同じでいいよ。でも…」

「でも？でもなんです？」

紫帽子の受け答えに気分を悪くしつつも緑帽子は聞き返した。

「パール族の生き残りがいて、もし、我らに命令されたと、嘘を…嘘かどうかはわからんが、そう告白されたら、また問題だな」

部屋が静かになった。嘘だろうが、なんだろうが、この手の証言は波紋を呼ぶのに十分な内容だ。「ニゴラス国に命令された」根拠がなくてもそれだけを言えば大変なことになる。

「生き残りなんているわけないし、大丈夫か」

その場の落ち込んだ雰囲気察して、自分の発言を後悔した紫帽子は後から手遅れな言葉を付け加えた。

町グレンの門の前。

外で待機しているエグリアースは、未だ座禅を組んでいる奇妙な男を見ていた。あれから1日は間違いなく経っているはずなのだが、全く動かない。ますます気味悪さを感じる。

ふと横を見ると、ステューがぼーっと遠い目で町の奥を見つめていた。

パール一族。兄と姉の3兄弟でゲルニア国に攻め込んできた。結

果的には、セラミス王のパール族にした数々の殺戮の復讐だったのだが、ゲルニア国民を殺したのはこのパール族なのだ。

その兄と姉もセラミスに殺され、生き残ったのはステューだけとなった。ファミリストンとの戦闘で片腕を切り落とされている。いっつ見ても痛々しい。

兄弟を殺されたショックで、なかなか心を開いてくれない。会話も日常的な挨拶のみで詳しく話しこむことができない。

エグリアースは、また奇妙な男へと視線を向けた。

つづく

第2部 第3章 沈黙の施設フライ その2

6階バリユアス国。

バリユアス国の王ブラウフィッシュに付いてきた側近は、あまりにも冷静過ぎるために『氷』と呼ばれている世話役のルリード、そして町グレンで待機をしているムトウの2人だったので、6階で使う部屋は王とルリードの2人だけだった。

部屋を用意する際にブラウフィッシュが「ぶわっはっは、どうだ？ルリード、久しぶりに一緒に寝るか？」と下品な笑いを立てたが、指名された本人のルリードは氷と呼ばれているに相応しい冷たい視線をブラウフィッシュに向けたまま「お断りします」と一蹴した。

ルリードが部屋に入り落ち着く間もなく、王の大きな声が響いた。「おい、今夜の食事はいつ食べるんじやあ」

大食のブラウフィッシュは普通の人の3倍の量を毎日食べる。その分間違はなく脂肪、肉となっていてるのだが、それだけ食べても腹の減る過程も3倍の早さで、常に何かを口に入れているということになる。

担当の神官が急いでやってきた。ボーダーという名前で、大神官デスペラドの4子息の1人であり、長男である。

「恐れ入ります、ブラウフィッシュ王、今、準備をしていますので、今しばらくお待ち下さい」

ブラウフィッシュの情報は既に聞いていたのだが、計算が違っていた。もう少し後でも大丈夫と踏んでいたのだ。それがこんなにも早く催促されるとは思わなかった。入門した時に何か食べていたではないか。ボーダーは内心そう思いながら、気分を害させないように丁寧に笑顔を振りまいた。

いくら下品とはいえっても一国の王である。さすがにそれで怒ることとはなかったが、それでも非常に不機嫌な表情でボーダーを睨み付けた。

身なりが必要以上に整い過ぎているボーダーは見た目から生真面目に見えるくらいそのままの人物で、かなりの神経質な性格であるが、裏を返せばマメな人間であり、何かを仕切るには最適な人物といえるだろう。

「申し訳ありません、王」

「うむむ…」まだ何か言いたそうであったが、ルリードが部屋から出てくるのが視界に入ったため、「まあよからう。早く支度してくれ」と引き下がった。ブラウフィッシュとしても、ルリードの冷たく冷静な口調で諭されるのは苦手であった。

ボーダーがほっとしたと同時に、後ろから聞き覚えのある声が響いた。

「お待ちせしました！」

長い茶髪を後ろで束ね、片手にはできたばかりの食事を持った1人の青年が立っていた。大神官デスペラド4子息の末っ子、グリークスだった。ボーダーの弟、まして神官には到底見えない。

ボーダーはグリークスの姿を確認すると、真っ青になった。

「おっ、おい、グリークス。お前なんでここにいるんだ？父上に呼び出しをもらっていただろう？」

慌てて話しかけたボーダーを無視してグリークスは通り過ぎた。

「む…。何者だ」

「はい、大神官デスペラドの息子、グリークスです。ブラウフィッシュ王のお声を聞き、メインの食事ができるまでの間で良ければですが…簡単ではありますが、私が作ったこの料理でも」

グリークスはブラウフィッシュに食事を差し出した。

たちまち食欲に意識を乗っ取られたブラウフィッシュはグリークスの料理に喰いついた。

「うむ…む…これはなかなか…美味いぞ」

ペチャペチャと音を立てながら貪りついている。

「ありがとうございます」

「おい、ルリード、お前も食べてみる、結構いけるぞ」

ブロウフィッシュがルリードに勧めた。「はい」と返事をし、ルリードがグリークスに近づいてきた。

一瞬、グリークスの身体が緊張で硬直した。

細い身体に、少しだけ茶色が混じった黒髪、整ったキツそうな顔立ちの裏に見える優しさ。他の者は、思わなくてもグリークスの目にはそう映った。

「あつ、どつ、どうぞ」

普段は緊張など皆無に等しい彼も今だけは違う。喋りに焦りを感じる。

そんなグリークスを気にも止めずにルリードは料理を受け取り、口に入れた。

美食の国バリユアスの王が褒めるくらいの味だ。不味いということはない。しかし、舌が肥えていると思われる彼女を唸らすことはできるのだろうか。

グリークスはじつとルリードを見ていた。

「どうだ？ なかなかいけるだろう」

食べ終わったルリードは、いつもの冷静な表情でグリークスを見据えた。

「ええ、とても美味しいわ」

いつもの口調で答えた。

その冷静で氷のような表情がほんの僅かだけ緩んだのをグリークスは見逃さなかった。その緩みこそ、グリークスの望んだ『優しさ』。彼女は『氷』ではない。グリークスは思った。

「あつありがとう。俺…じゃない、私は大神官デスペラドの息子…」
浮かれて名乗りかけたグリークスをルリードは制した。

「そう何度も言わなくてもいい。貴方の名前は先程聞いた」

これこそ、氷のルリードを呼ばれる由縁なのだろう。何度も聞いていてもここまでくれば、もう一度黙って聞くものだ。だが彼女はそれを時間の無駄と考える人なのだ。

「それでは、失礼します！」

横から兄のボーダーが割り込んできた。

「ほら、さっさといけ！それと父上が呼んでいる。いいな、必ず顔を出せ」

そう言いながら、笑顔を絶やさず、ボーダーはグリークスを追い出した。

グリークスはルリードの姿を目に焼き付けようと追い出されて見えなくなるまでじっと見つめていた。

つづく。

第2部 第3章 沈黙の施設フライ その3

7階アーガス国。

「おや、ジューダス殿、こんなところでどうしたのです」

アーガス国、鷹の三騎士の1人であるジェイミーが、国王であるダニエル王の部屋近くまできて驚いたように言った。

鷹の紋章が彫られている鉄仮面を被った騎士が堂々とダニエル王の部屋の扉を塞いでいたからである。同じく鷹の三騎士、ジューダスであった。

3人目の騎士は町グレンで待機中のスノーである。

まだ10代と見える少女のジェイミーは鷹の首飾りを指で撫でながらジューダスに近づいていった。こんな少女が鷹の三騎士なのだ。一体どれほどの実力なのだろうか。

「…む。ジェイミー殿か」

「ここは大丈夫ですよ。今日は自分の部屋で休んだらどうですか」

「いいや、そういうわけにはいかん。王の身に何かあつては困る、それに部屋に帰っても…」

「口喧嘩の相手がいない…と？」

ジェイミーは笑った。スノーのことを言っているのだ。ジューダスとスノーの口喧嘩はアーガス国では有名で見世物とまで思われているくらいだ。他愛のない話題がいきなり言い合いになるのだ。見えていて面白いやら複雑やらと周りの人々を困惑させている。

「いや…べつにそんな」

仮面からは表情は読み取れないが声の雰囲気で伝わる。照れ臭そうにジューダスは言った。それから毅然と姿勢を正して力強く続けた。

「とにかく、我らは王の安全のためにいるのです。ここは私が完全に警備します。なので、ジェイミー殿こそゆつくりと休まれるがいい」

言い出したら聞かない性格のジューダスはこうなるともう動かない。そのことをよく知っているジェイミーは仕方ないと溜息をついた。

「まったく。では気の済むまで立っていないさい」

「そうさせて頂く」

「ではダニエル王、先に休ませてもらいます」

聞こえたのかは定かではないが、ジェイミーは扉越しに言葉をかけて自分の部屋へ戻っていった。

ジューダスは何も言わず、ただじつとその場に立っていた。王を守るという任務に就いたのだ。

2階ガシーベ国。

マリークレール女王の側近であるデュバルドが廊下を歩いていた時に、ちょうどガシーベ国の3女人衆の1人で魔法使いのレイと出会った。

「どうした、レイ」

冷ややかにデュバルドは言った。

「女王の様子を確認しにきました」

「必要ない、先程私が確認した。女王はよく眠っておられる。早く寝るのも美を保つ手段であるからな」

「そうですね、わかりました。それでは私も休ませてもらいます」

「わかった。ああ、そうだ。その前にリサの様子は見ておいてくれ」
そう指示するとデュバルドも部屋へと戻っていった。

レイは、2・3奥の部屋へと向かい、扉を軽く叩いた。

「リサ、起きているか」

「……」

沈黙。いつものことだ。レイはゆっくりと扉を開けた。

三つ編みの幼い女の子が、暗い部屋の中で寝台の上に座っていた。
「眠れないのか？」

レイが話しかけた。だが無言。

このリサという少女はマリークレール女王が連れてきたのだが、全く詳細がわからない謎の少女である。

同じ女人衆の現在町グレンで待機しているミシエルは、こんな年齢の低い女の子をこういう大事な場に連れてきたことに不満でリサを妹のように思っている。

レイは妹までは思わなかったが、このガルド会議という世界的に大事な行事に連れてきたということに関してはミシエルと同意見だった。

しかも、このリサは誰にも心を開かず、喋るということがない。事実、そんな場面は見た事もない。

「…」

レイは溜息をついた。

「早く寝るんだ、いいね」

無理矢理寝かしつけてもいいが、それは命令ではない。様子を見ることが命令だ。静かにしていると報告しようとレイは「お休み」とだけ言っただけで扉を閉めた。

闇。

暗闇。

レイの足音が遠くなる。

それでもリサがその場を動くことはなかった。

3階ロクシー又国。

異教徒の国、ロクシー又。そのためか、他のどの階よりも静かである。神殿の者や施設の者もあえて近寄らないのだろう。ここでも人間性ではなく、崇めている神の違いに対する偏見は強い。

しかし、96歳なるドリムオン陛下は既に慣れたのか、気にする素振りは見せない。

「おい、こら、タイラー！逃げるな、勝ち逃げは許さんぞ」

ドリムオンの大声が部屋に響く。

うんざりした顔で黒肌の男、タイラーが振り返った。

「陛下、もういい加減にしてください。夜も更けてきました。そろそろ寝る時間です」

「うるさい！ まだまだこれからじゃ」

ドリムオンとタイラーは『カルプ』と呼ばれる博打をやっていた。今夜はタイラーの大勝ちらしい。

ロクシー又国、特にドリムオンの性格なのか、彼はあまり上下関係を重要としていない。96歳のドリムオンに対して、タイラーは38歳である。これだけの年齢差でも、友人のような会話になる。その代わり、將軍であるタイラーが徹底的に上下関係を厳しくしている。

「駄目です。陛下。もう寝るのです」

叱るようにタイラーが言った。

それを聞いたドリムオンは渋々認めた。

「わかったよ、わかった」

「では、おやすみなさい陛下」

部屋から出たタイラーに部下であるノバデイズが話しかけてきた。「將軍、オルウェイとソルティからですが、町の方は異状はないですし、脱出経路も確認したとの報告です」

「そうか、わかった。ご苦労。お前ももう休め」

タイラーはそう指示し、自分の部屋には戻らずにいた。

寝ずの番をするつもりなのだ。重要な事は率先して自分からやる。性分のタイラーは窓から外の景色を見ながら夜を明かすことになる。

つづく

第2部 第3章 沈黙の施設フライ その4

4階ドルコルド国。

マルーン教皇は椅子に揺られながら静かに本を読んでいた。彼の愛読書は伝記、聖書ともなっている、太陽神と絶望神の戦いの本。毎日読んでいても飽きることはなかった。

扉を叩く音。マルーンは本を閉じて振り向いた。

「ロンシュカ」

「はい」

扉の向こう側から、女の声がする。

「入れ」

眼鏡をかけた女性が入ってきた。マルーン教皇と恋仲であるロンシュタットであった。彼女はマルーンの右腕として全てを担ってる。「そんなことしなくとも、普通に入ってくればいいではないか」

「いいえ、これは、周りの目もありますので、はっきりしておかないといけません。今は、貴方は聖国ドルコルドの指導者なのですから」

厳しい顔でロンシュタットは言った。

「わかった、わかった。…で、今は仕事なのか？」

「はい、先程、ブランチから報告が入りました」

ブランチとはドルコルド国の戦士で、今回の警備として呼ばれている部下である。

「計画通り、シールとカインドは動いているようです」

「そうか…では問題なからう」

「ですが、あとは神殿の方の…」

「いや、ヴィジョンズも大丈夫であろう」

「…だいいいのですが」

マルーンはグラスを手に取った。ロンシュタットがそれを見てワインを注いだ。マルーンは一気に飲み干した。

「明日の会議で世界が変わる。再び混沌の闇へと時代は進むだろう」
グラスを回しながらマルーンは言う。

「闇という闇で覆いつくされて、絶望という言葉が人々の脳裏に刻み込まれた時……」

グラスが手から離れて、地面に落ち、粉々に割れた。

「我がドルコルドが世界の指導者となる時だ」

マルーンの顔が歪む。

ロンシュタットは何も言わずに頷いた。

「さあ、仕事はいいだろう？ ロンシュ。女に戻るがいい」

マルーンはロンシュタットの手を取り、身体を引き寄せた。服に手をかけゆつくりと脱がしていく。ロンシュタットは微笑み、柔らかな唇をマルーンの唇と合わせた。

「静かにしろよ、いいな」

赤髪の女、カインドが言った。

施設フライの近く。神殿に行くためにはどうしてもこの前を通り過ぎなければならない。カインド本人は容易いが心配なのは相方のシールである。『黙る』ということがシールに出来るのか、カインドの心配はまさにその1点だった。

カインドに諭された金髪の男、シールは手で口を大げさに押さえた。

「その行動がイライラするんだ」

カインドは怒ったが、大きな声が出せないために迫力に欠けている。

施設フライを素早く通り過ぎた。

同時に感極まったのか、シールが口を開いた。

「やった、やったよ！ カインド！ 通り抜けた！ 大成功だ！」

速攻でカインドの強烈な蹴りが、シールの顔面を捉えた。

「ぶっ」

シールはその場に転げた。

「ひっ、酷いよ、カインド」。蹴るなんて。酷いよ、カイちゃん」

「うっさい、静かにしろと言っただろ、口で言ってもわからないのなら、こうするしかないだろう」

カインドはそのままシールを無視して先へ進み始めた。

「ああ、待つてよ、早いよ」

その後をシールが追いかけていった。

エグリアースは外で待機しているのも苦痛だと感じ始めていた。

相変わらず喋らないステューとアリシエが寝ているのを確認して、そろそろ自分も寝ようかと思っていた。

僅か2日で毎日の日課のように思えてならないが、エグリアースは座禅を組んでいる男の方を確かめる意味を持って見た。

「……なに？」

エグリアースは呟いた。奇妙な男はその場にはいなかった。忽然と消えてしまっていたのだ。

思うよりも身体が先に動いていた。男のいた場所へと歩み寄る。いない。辺りを見回しても何の痕跡も見当たらない。

だが、元々勘の鋭いエグリアースだったからこそ感じ取ることができたのだろうか。意識が、もう1人の自分が、奥の方で呼んでいるように聞こえた。

エグリアースはいつでも戦闘体勢に移れるように腰の剣に手をかけた。

ゆっくりと奥へ進む。誰も通ることのない薄暗い場所。

そこでエグリアースは目にした。有り得ない光景を。

「……そんなまさか」

これはもう会議どころではない。そう判断したエグリアースはすぐにファミリストン達への報告を決断した。

まずは門番を説得しなければならない。

それはこの光景を見せれば納得するであろう。地面から静かに生まれつつある、あの怪物の姿を。

今はまだ活動までは至っていない。今なら間に合う。踵を返そうとしたその時。

「おまえ…見たな」

後ろから冷酷な男の重い声。

エグリアースは瞬時にあの奇妙な男だと理解した。

振り返ると同時にエグリアースは剣を抜いた。振り向きざまの勢いで横一閃するつもりだった。

剣は男の身体に斬り当たる瞬間に、ぱあっと光ったかと思うと跡形もなく消え去った。

「…！」

驚く間もなく男の拳がエグリアースの腹にめり込んだ。

「がふっ…」

呼吸が一時的に不可能になった。エグリアースは意識を失い、倒れ込んだ。

男はエグリアースを放り投げ、その場に座り、引き続き座禅を組んだ。

） 第3章 沈黙の施設フライ 終 ） 第4章につづく

第2部 第4章 不穏なバロゲニア神殿 その1

バロゲニア神殿。

神殿内は、ガルド会議の準備で他人を構う暇もないくらいに忙しい。

そのある一室に大神官デスペラドはいた。そこはデスペラドの書斎で、明日の会議のための最終調整をしていた。それとは別に誰かを待っているようでもあった。

扉を叩く音。

「グリークスです」

デスペラドは読みかけの書類を机の上に置いた。

「入れ」

少し怒りの混ざった声を確認してから、グリークスは言うとおり部屋に入った。

デスペラドは続けた。

「遅かったな、グリークス。随分前に呼び出したはずだが？」

デスペラドはグリークスを睨んだ。

大神官を受け継ぐ者は、同じ血を引いた者というのが昔からの決まり事になっている。デスペラドは今回の会議の働きぶりで後の大神官を決めるのだ。候補者は4人。いずれもデスペラドの息子達である。

その末っ子がグリークスだった。

「すみません。どうしてもやらなければならない仕事がありました」
「バリユアス国の女に食事を出すことがか？」

長男のボーダーからの報告なのだろう。グリークスは内心舌打ちをした。点数稼ぎか。なんでもかんでも報告すれば忠誠を見せれるとも思っのか。

「いえ、食事担当の兄が困っていたので手助けしたまでです」

「それぞれの担当がいるのだ。お前はお前の仕事をすればいい」

デスペラドは溜息をついた。

「グリークス。お前も聞いておるだろう。後継者の話を」

「ええ、まあ」

グリークスは無感情で答えた。

「何もないのか？お前には。その話を聞いて何も感じないのか？」

グリークスは少しも考えずに間髪入れずに返事をした。

「ないですね。後継者など興味がないです」

「そうか……」

答えを予想していたのか、デスペラドに大して驚きはなかった。

「この会議が終わって後継者が決まったら、旅に出ようと思つています。勿論、俺が後継者ではないことが前提ですけど」

「…お前は どうして そうなんだ」

デスペラドはグリークスを見据えた。

「確かに お前の 頭の 回転の 良さは 素晴らしい。息子達の中でも一番 だろう。器で 言ったら お前が 大神官に 相応しい かもしれん。だが その 姿勢が悪い。なぜ 神官になる うとしない のだ」

以前妻ピースフルに洩らそうとした本音が口から出た。

他の兄弟は認めたくはないだろうが、グリークスの頭は良い。本人もそれを出さないように意識をしているのだが、そういうところは黙ってても自然と出てくるものである。

デスペラド自身、その場の状況判断、冷静に物事見る能力はグリークスが最も優秀だと思ってる。

長男のボーダーは、真面目過ぎて仕事はそつなくこなすかもしれないが、応用がきかない。次男のヴィジョンズは、全てにおいても優秀ではあるが、野心が強すぎて任せるにはまだ不安が残る。3男のリゾートも、指示待ちの人間で自分でも判断がまだついてこないし、喋りのクセが人前で見せる喋りではない。

総合性で見ると、やはりグリークスが相応しいはずなのだが、この4男のグリークスは神殿に対して何の興味も思い入れもない人間なのだ。一番最初に必要な神殿への思い入れ。それがグリークスに

はない。

今回の会議で、後継者を決めることになったのはそういう理由なのだ。考え始めると4人が4人とも、欠点があるからだ。グリークスが後継者への思いが強ければ、迷わず彼に決めていただろう。

そんなデスペラドを見透かすようにグリークスは言った。

「俺にはそんな器はありませんよ。神殿に何の興味がないのですから。まずは、その仕事に対してやる気があるかどうかでしょう。足りない能力は後からついてきますよ。でもやる気がない者を選ぶのは間違ってます。兄達は全員やる気はあると思いますけど」

遠回しに、大神官への道を辞退している言い方をした。

「もういい、自分の仕事に戻れ」

これ以上話しても無駄だと悟ったのか、デスペラドは諦めたように言った。

グリークスは一礼をして部屋から出た。

「…残る3人が…」

悔しさからか、それとも諦めの本心なのか、デスペラドは呟いた。

部屋から出たグリークスを待っていたのは、3男の兄、リゾートだった。

「やあ、リゾート兄さん」

「お・お・お前、ち・父上と、な・何の話だったんだ？グ・グリークス」

緊張している訳ではないが、元々喋りにクセがあるリゾートはどもりながら話した。いつものことなので、気にはならない。

「うん？ああ、ちゃんと仕事してなくてさ、怒られてたんだよ」

「あ・あ・あの、バ・バリュアス国の、お・女のことです？」

「…うん、まあね、そんなところ」

兄のボーダーの仕事を邪魔したのがよっぽど気に入らなかったらしい。ボーダーは皆に報告と称してあの時の件を言いふらしていた

のだ。

「す・す・好きなのかい？」

ニヤニヤしてリゾートが言ったが、GREEKSはそれを無視した。
「ところで、ヴィジョンズ兄さんは？」

「ヴィ・ヴィ・ヴィジョンズ兄さんは、外に出たよ。け・け・警備を確認したいんだってさ」

それを聞いてピクリとGREEKSの眉が上がる。

「どうしてさ？警備はリゾート兄さんの仕事だろ。ヴィジョンズ兄さんは議題のまとめのはずだ」

「し・し・知らないよ。ぼ・ぼ・僕の仕事の確認じゃ・な・な・なの？だ・だ・だって、お・お前も、ボ・ボ・ボーダー兄さんの邪魔をし・し・したじゃないか」

何の疑問も持たずにリゾートは言った。

GREEKSは気になった。GREEKS本人は自分の仕事などしてないわけで、時間に追われるということはないかったが、他の者は違うはずだ。人の仕事を確認する余裕があるのか。

GREEKSは心の奥底に微かに芽生えた疑問を思い留め、リゾートと別れた。

つづく

第2部 第4章 不穏なバロゲニア神殿 その2

神殿外。

仕事の合間を縫ってヴィジョonzは立っていた。誰かを待っていた。人の目が気になるのか、立場上目撃されたらマズイのだろう、イライラと落ち着かない素振りをしていた。

茶色の髪でもグリークスとは違って、長くはない。整っている。

「まだかつ」

ヴィジョonzは独り言を呟いた。

「きたよ〜ん」

軽い感じの男の声が暗闇から聞こえてきた。ヴィジョonzはビクッ驚く。

闇の奥から、金髪の男と赤髪の女が現われた。

何の警戒も気にしていない男に対して、女の方は疑念の視線を向けながらヴィジョonzに近づいてきた。

「お互い初めましてだが…」

「うむ、私がヴィジョonzだ」

ヴィジョonzは握手をしようと手を差し出した。

「あゝい、よろしくね〜、僕はシール。こっちの赤い髪はカインドつていいます!」

先程の軽い言葉の男が横から飛び出して話しかけてきた。思わずヴィジョonzも1歩下がる。

「う…うむ」

今度はそんな挨拶どうでもいいとばかりにカインドが割って入った。

「お前がヴィジョonzだという証拠はあるのか？」

「私がここにいることがその証拠だろう」

ヴィジョonzは疑われていることに不機嫌に言った。

「いや…わからない。誰かと入れ替わっている可能性がある」

「なんだと、そこまで疑うのか」

カインドは少し黙る。何かに気づいたようだ。

「証明する方法はあるな……」

そう言つてカインドはシールの髪を掴み引つ張りながら再び闇の中へ消えていった。

何がなんだかわからないヴィジョンズだったが、別の気配が身体を伝わった。

「誰だ」

怒気をこめてヴィジョンズは叫んだ。

「俺だよ、兄さん」

その気配はグリークスだった。

ヴィジョンズはホツとした反面危険も感じた。なぜここにグリークスがいるのか。

「どうしたグリークス、こんな所に」

気持ちを抑えて名に食わぬ顔でヴィジョンズは言った。カインドの証明する方法とはこのことだったのだ。いち早く気配を察したカインドは隠れて会話を聞こうと思ったのだ。その会話で、ヴィジョンズ本人だという確認ができる。

「それはこつちの台詞だよ、ヴィジョンズ兄さん。兄さんこそ、どうしてこんな所に？ここは警備する場所じゃないはずだ」

何もかも知っているのか。警備担当のリゾートを差し置いて理由付けをしてこの場にきたことを。それでも知らぬ顔をするしかヴィジョンズには道がなかった。

「ちよつと風に当たりたくてな。よくここを歩くんだ」

「ふん」

不満そうにグリークスは辺りを見回した。やはり何か怪しいと踏んでいるのだとヴィジョンズは思った。闇の奥に行かせるわけにはいかない。そこにはシールとカインドがいるのだ。

グリークスは勘が鋭く、頭も良い。少しでも変な態度をとるとすぐ疑問に思ふはずだ。いつものように振舞うしかない。

「それにしても聞いたぞ、GREEKS。バリユアス国の女に手を出したそうじゃないか」

GREEKSは迷惑そうな表情をする。

「ボーダー兄さんから聞いたのかい。手を出したなんて…。俺は食事を作っただけだよ。変な風にとるのはやめてくれ」

「わかった、わかった。そうムキになるな。私はもう少しここで涼んでいくつもりだが。お前は早く自分の仕事に戻らないといけないのではないのか」

「自分の仕事なんて…ないよ。でも、まあ、戻るよ。じゃあね、ヴィジョンズ兄さん」

「ああ」

GREEKSは神殿の中へと戻っていった。

しばらくして、シールとかインドが姿を見せた。

「危なかったねえ…っていうか、カインド！僕の髪を引っ張らないでよ」

シールは楽しそうに、悲しそうに言った。

それを無視して、カインドはヴィジョンズの方を向いた。何も言わないが疑問は解決したようだ。本題をいきなり切り出した。

「準備はいいのか」

「ああ、ここから忍び込めるので、待機しておけば良い」

ヴィジョンズは入口を指差した。もう何年も開かれたことがない扉。関係者全員が忘れている扉。その中から神殿内に入り込めるのだ。

「見つかる心配は？」

「ない」

わかったとカインドは呟いて、扉へ向かった。

「明日決行だな」

カインドが振り返って言った。

「お前の父、大神官デスペラド暗殺を…」

「うむ」

「それでいいのか？」

改めてカインドがヴィジョンズに問う。
ヴィジョンズは迷いもなく答えた。

「それでいい」

ふんつと鼻で笑ったカインドはシールを連れて神殿内に入った。
後に残されたヴィジョンズは自分自身を確かめるようにもう一度
「それでいい」と声に出した。

いよいよ、明日、ガルド会議が開催される。

それぞれの思惑を含めて。それぞれの野望を含めて。
運命の歯車はゆっくりと回る。

長く続いた歴史の糸が遂に解れる時がくる。
歯車が狂い始める。

希望と絶望の出現を祈る人々の姿を背に受けて。

蘇るは希望よりも絶望。絶望よりも人の野望。

月は美しく神殿を照らす。

明日の夜までその美しさを保つことが出来るのであろうか…。

〈 第4章 不穏なバロゲニア神殿 終 〉 第5章につづく

第2部 第5章 乱入する混乱 その1

会議当日。

長かった準備期間、滞在期間を経て、第9回ガルド会議が開催される。開催される場所は神聖なるバロゲニア神殿内大会議室。

各国の側近達は大会議室の入口まではついてこれるが、中には入ることが許されない。会議に望むのはあくまでも各国の代表者達である。

バリユアス国、ブロウフィッシュ王。

アーガス国、ダニエル王。

ドルコルド国、マルーン教皇。

ガシーベ国、マリークレール女王。

ロクシーヌ国、ドリムオン陛下。

ルキボル国、オークランド王子。

ただし、ニゴラス国のみ、ニゴラス王は虹帽子の7人として許される。

進行は大神官デスペラド。

以上の者だけが入室が許され、会議が行われるのである。

最初にルキボル国のオークランド王子が入室した。一番年下であったし、後から行くということに抵抗があったからだ。それに側近を引き連れてくる中、自分だけ誰もいないという情けなさと恥ずかしさも加わって、誰よりも目が覚め、誰よりも早く会議室に入った。続いて、バリユアス国のブロウフィッシュ王とガシーベ国のマリークレール女王が談笑しながら入っていった。この2国は美容という繋がりで仲が良い。バリユアス国は美食の国。美容の食事の提供、対するガシーベ国は女性優位の国、美容のことの執着心は計り知れない。「ぶわっはは」「おほほ」という下品な笑い声を響かせながら会議室へと消えていった。

無言で現われたのは、ニゴラス国のニゴラス王、つまりは虹帽子

と呼ばれる7人。用心深過ぎるため、6人の影武者を用意しているのだ。虹の7色の帽子をそれぞれが被っている。ニゴラス国の王がこの7人の中にいるはずなのだが、その正体は誰もわからない。無言なのは、当たり前といえば当たり前なのかもしれない。今回の会議の議題は、ゲルニア国滅亡の件である。その原因ともいえるのが、ニゴラス国出身のパール族なのだが、関与を疑われても仕方がない。それにゲルニア国のセラミス王とニゴラス国とは怨恨の線もある。

ドルコルド国のマルーン教皇も静かに周りの人間に会釈しながら、会議室へと入っていった。若いわりには余裕のある雰囲気を漂わせている。どこことなく近寄り難い覇気を飛ばしていた。

逆に、喋りすぎて、側近の者に注意を受けていたのは、ロクシー又国のドリムオン陛下。高齢にはとても見えないほどの元気さである。異教徒というハンデを全く気にもしない、今となっては気にしたところでどうでもいいのだと開き直っているのだろう。最後は押し込まれるように会議室に入れられた。

最後に現われたのはアーガス国のダニエル王。35歳という若さで王の位に就いた。精悍な顔つきに、以前軍の最先端で戦っていたせいか、右臉の上と左の頬に傷がある。なるべくして、就くべくして就いた王という地位。決して戦いが好きではない。しかし、アーガスという国は戦争の歴史。国を守るために戦わざるを得ない。ダニエル王は平和を願いながら毎回のガルド会議に挑んでいる。だが、聞こえてくる話は、国の滅亡などという良くないことばかり。会議室の扉の前で溜息をついたダニエルは大きく息を吸って気を引き締めた。そして勢いよく扉を開けた。

大神官デスペラドが会議室に入ってきたのは、各国の王が集合してから5分後のことだった。

円卓のテーブルに7国の王が座っている。デスペラドは席には座

らずに7人の顔を見回した。

「よくぞ、長旅を経て、来られました。心より感謝します。世界バロゲニアガルドの平和のため、9度目となりますが、世界ガルド会議をここに開催します」

デスペラドは一礼してから席に座った。

「まずは…紹介せねばならぬ人物がいます。今回が初めての参加となるでしょう。ルキボル国のオークランド王子とドルコルド国のマルーン教皇です」

オークランドとマルーンは交互に会釈した。

「それでは…早速進めます。ここ数回は何事もない議題だったはずですが、今回は過去最大の議題と言えるかもしれません。バロゲニアガルド8国の1つ、ゲルニア国滅亡に関してです」

デスペラドの言葉と同時に、ニゴラス国のニゴラス王。この場合、緑色の帽子を被っている者が代表して座っており、残りの虹帽子6人は後ろにいる。その緑帽子のニゴラス王が口を開いた。

「まず一言いわせてもらいたい。…というのも、皆さんの視線が痛いものでね。ニゴラス国に対して変な噂がたっているが、我らの国は全く関係ない。それだけは先に言っておきます」

デスペラドが、んんっ、と咳き払いをした。まだ自分が話しているという合図だ。デスペラドは続ける。

「ゲルニア国と連絡がいつまで経っても取れないということに心配した私達神殿の者が見に行ったときに、城も町も村も全て破壊されていた。なぜか、墓が立てられてあったのですが。港で聞き込みをした結果、怪しい3人組がゲルニアに向けて出発したとの情報を得ました」

「その3人組が、なぜ、その、噂になっている、パ・パール族だと？」

ロクシーヌ国ドリムオン陛下が、横から口出しした。ニゴラス王の方を気にしながら。

「ご丁寧に、名乗ったそうです。大男、女、子供の3人組があまり

にも不自然だったので、港の人間が好奇心で聞いたのです。その時の返事が…子供が答えたそうですが…パール族なんだと…」

「嘘かもしれないじゃないか」

後ろから赤色帽子が叫んだが、周りの者に口を押さえられた。いくら入室が許されておる虹帽子でも、今は緑色帽子の男が代表なのだ。残りの者が口を出す場ではない。

「子供が嘘でそんなことを言わないでしょう。パール族と名乗ったのは本当だと思いますが」

マルーン教皇が言った。確かに本当に嘘をつくのなら、別の国を名乗ればいい。

「まだあるのです」

デスペラドは更に喋る。

「その3人組とほぼ同時刻に別の1人が出航しているのです」

周りを見る。顔色を窺うように。

「そのもう1人は、白い髪の男だったそうです」

デスペラドのその言葉に、アーガス国のダニエル王は、誰にも気づかれないようにピクリと眉を動かした。

つづく

第2部 第5章 乱入する混乱 その2

白い髪の男：聞いたことがある…とダニエルは思った。我がアーガス国の者だ。名はなんといったか…思い出せない。国内では有名な男だ。どうしてそこまで名が知れている。そうか。歴戦の勇者クラシェイカの初めての弟子だった男だ。剣を教えるということが一切なかったクラシェイカが初めて教える相手としてその白い髪の男を選んだ。当時はかなり話題になったはずだ。その男がなぜゲルニア国滅亡に関与しているのだ。我が国の者だとわかれれば、追求はアーガスにも及ぶ。ダニエルは冷静に状況を判断した。今この場では、何も知らないフリをするのが最善だと思った。

「パール族なる3人組、そして謎の白い髪の男、この4人が今回の滅亡に関与しているとは思えません」

「ぶわっはは。そうなるのだ。やはりパール族はニゴラス国が怪しいじゃろうなあ」

下品な笑いで、バリユアス国のブラウフィッシュ王が言った。

その言葉に不機嫌を露にした緑帽子のニゴラス王が反論する。

「パール族がニゴラス国だと決め付けないで下さい。確かに我が国の出身ですが、行動に関しては知る由がないのですから。貴方達だってそうでしょう？自分の国の者が他の国で事件を起こしても把握もできないし、わからないでしょう？この世界の医者はルキボル国も出身者です。ですが、もしその医者が殺人を犯したことをルキボル国が把握していますか？把握することができますか？」

緑帽子はオークランド王子を睨んだ。

「え…あ…」

とぼつちりを受けた形になったオークランドは焦ってしまい何も言わずに俯いた。それは、少なくともオークランド自身は把握できないということの意味していた。

こういった場合には、例え無理でも毅然とした態度で答えるもの

だが、オークランドにはその度胸がないために、俯くということになった。それを見てブラウフィツシュが鼻で笑った。

「とにかくパール族がニゴラス国という図式はやめていただきたい」
緑帽子のニゴラス王は力強く言った。

「では、大神官さん、ゲルニア国へ向かった者を目撃したのであれば、誰かが帰ってきたのも目撃した人がいるんじゃないくて？」

マリークレール女王が、髪をかき上げて言った。若い者がやれば色っぽく見えるのだろうが、女王の年齢では大人の色香も通り越してしまっている。

女王の質問に大神官は軽く頷いた。

「ええ、なんと帰ってきた者はいます。正確には『者達』ですが。子供も含まれていたようですが、数人の者が船で帰ってきたそうです。それは、ゲルニア国所有の船だったから覚えていたそうです。

さすがに人数までは覚えていませんがね。しかし、間違いなく、白い髪の男はいたという報告をもらっています」

ザワツと周りが騒いだ。『白い髪の男』という意識はみんなの脳裏に新たな知識として加わったことだろう。

ダニエル王は無表情で聞いていた。

「その白い髪の男ってさ、聞いたことあるのう」
突然ドリムオン陛下が話し出した。

ダニエルの背筋が冷たくなる。

「どこだったかなあ、どっかの国に、そういう奴がいるって話を聞いたことあるんだけどなあ」

ドリムオンは思い出そうと頭を抱えた。

ロクシーヌ国、ニゴラス国、そしてアーガス国の3国は何度も争ってきた歴史がある。当然お互いがお互いの情報を知るために、偵察や調査などを一切していなかったとは言いがたい。第1回ガルド会議が開催されてもそれは続いていただろう。そうなると白い髪の男の情報くらいは薄っぺらな書類程度に書かれていても不思議ではない。

オークランドは、一瞬青ざめた。それは何の前触れもなくやってきた悪寒だった。医療の国ルキボル。あらゆる病人や怪我人を診てきたせいなのか、ごくまれに、何かの『死』という現実に出くわした時に感じる悪寒。ここ数年そういった気持ちにはなかったのだが、なぜ、いま、ここで、その感覚に捉われるのか。

オークランドは辺りを見た。…といっても見るところは、席に座っている自分を除く7人の表情だけだった。1人ずつ順番に見ていく。まだドリムオンは頭を抱えていた。それを全員が見ていた。心なしか、ダニエル王の顔には焦りが見える。

いや、違う。オークランドは思った。1人だけ、ただ1人だけ違う。

それは、何かを期待している瞳だった。何かの合図にも見えた。周りの者と極端に顔色から視線から違う。まるで「今だ」と命令しているような瞳だった。

ドルコルド国、マールン教皇の瞳は。

「そうだ、思い出した、確かダニエル王、あんたの…」

物音が8人のいない方向から聞こえた。ありえない方向。会議室にはここにいる8人しかいないのだ。

突如頭上から覆面をした2人の人間が降ってきた。手には短剣を持っている。

「…っ！」

瞬時に状況を察したダニエル王が、机を放り投げた。数々の戦いの経験からなせる動きなのだろう。

「下がれっ！」

ダニエルの機転で投げられた机は一瞬ではあるが上手く覆面の者への目隠しになった。同時に賊と判断した各国の王は叫んだ。

「賊だあ！賊だあ！」

「タイラー！暗殺者だ！タイラー！」

「鷹の騎士達よ、逃がすでないぞ」

「きゃあああ、デユバルド、デユバルドオ」

「虹帽子達よ、何をしてるのですか、早く集めるのです」

側近がないオークランドの声が聞こえないのは当たり前だが、マールン教皇の声が聞こえない。オークランドの疑惑は確信へと変わりつつあったが、彼には何かを言ったり、誰かに伝えたりする勇氣はどこにもなかった。

「ちっ」覆面賊の1人は軽く舌打ちした。もう1人は「うふふ」と喜んでるように見える。

叫び声が響き終わる間もなく、待機していた各国の側近達が怒涛の如く入ってきた。

覆面賊は各国の首脳には見向きもせず、ある一方向に突進した。その先は。

大神官デスペラドがいた。

「あっ」

誰かの声が聞こえた。

デスペラドは驚くこともなく、そして、覚悟をすることもなく、覆面賊の手によって、短剣を突き刺された。

つづく

第2部 第5章 乱入する混乱 その3

沈黙。各国の頂点に立つ者達、そして、その側近の者達が凍りついた。

世界に多大なる影響を与えるバロゲニア神殿。この神殿があるからこそ、このガルド会議があるからこそ、均衡が保たれている。

その神聖なる神殿の長、大神官が、突然現われた賊に襲われたのだ。

まさにあつという間の出来事であつた。

覆面賊の目的はただ1人、大神官デスペラドだった。

「ぐっ…ぐぬ…」

胸を一突き。デスペラドは別れの言葉も出す暇もなく、その場に倒れた。

「だっ、大神官」

大声を上げたのはロクシー又国のドリームオン陛下だった。異教徒という圧倒的差別から救ってくれた恩人である。歳の差は関係ない年下だろうが、敬うことは出来る。ドリームオンは急に怒りが湧いた。「タイラァー！奴らを捕らえろ」

ドリームオンの命令と同時に、黒肌の男、タイラーが覆面賊に向かって突進した。

「わあ、きたよ、カインド」

覆面の1人がボソボソと言った。

「馬鹿っ、名前を呼ぶな」

もう1人の覆面が言った。女の声だ。

「あっ、そうかあ」

「とにかく目的は果たした、逃げるぞ」

2人の賊はデスペラドを後にしてその場から離れようと動き出した。

だが、ロクシー又国の將軍タイラーの動きはそれ以上に早かった。

賊の前に先回りして逃げ道を塞いだ。

「よしっ」

ドリームオンが叫んだ。

「……」

あまりの早さに声にはしませんが、驚きを隠せない賊。

タイラーは剣を抜き、構える。一寸の隙もない構え。構えたまま微動だにしない。

タイラーは受け身の剣である。後の先というべきか、相手からの仕掛けた動きを見切って受けきり、次なる攻撃へと繋げていく。即ち後出しの剣。これにはかなりの忍耐が必要だ。相手が仕掛けてくるまでは自分から仕掛けることは絶対にない。それを待つという精神力がないと出来ない戦法だ。

それがわかつているのか、賊の方からは何も仕掛けてこない。いや、これないのだ。

皆が見守る中、デスペラドの息子達が駆け込んできた。

「あつ……あなた……」

最初に崩れ落ちたのは妻のピースフルだった。遠のく意識により、重たくなった身体をアーガス鷹の三騎士のジューダスがしっかりと受け止めた。

「そっそんな」

「父上」

「……」

「……なんてことだ」

順番に、ボーダー、リゾート、グリークス、ヴィジョンズが会議室に飛び込んできた。父親の無残な姿を見て呆然としている。

ただ2人を除いて。

1人はグリークス。彼の頭は過去最高に活動していた。父親への悲しみよりも、犯人を、首謀者を探すことが大事だということを悟っているのだ。慌てふためいているボーダーやリゾートとは、根本的な考え方が違うようだ。結論はいとも簡単に出た。これまでの状

況でどう考えてもおかしいのは、彼しかない。

もう1人の冷静傍観者、ヴィジョンズ。

ヴィジョンズの脅威は弟グリークスだけであつた。こうしている間にもグリークスは全ての全貌を見極めるだらう。それまでには手を打っておかねばならない。手は打った。まさか、自分が賊であるシールとカインドを招き入れ、父親であるデスペラド暗殺の企てに手を貸していたとなると大問題である。バレるわけにはいかない。ヴィジョンズはこれからこの神殿を束ねていかねばならないからだ。邪魔なのはグリークスなのだ。

ジリジリと賊とタイラーの差が縮まっていく。

「うつつ」と賊の1人が群集の方を見た。

よし、今だ！とヴィジョンズは心の中で叫んだ。

「たっ…助けてくださいよ」

情けない男の声。群集に向かって投げかけている言葉。誰に言っている。

「グリークス様あゝ」

「…なっ…!!」

全ての視線がグリークスに注がれた。

ヴィジョンズの口元が嫌でも醜く歪んでいくのを誰も目撃することになかった。

グレン町外。

パール族のステューは目が覚めていた。いつの間にかいなくなつたエグリアースの姿を探すために辺りを見回していた。

アリシエは相変わらず眠っている。

兄と姉の死からそろそろ脱出しないといけないと思ひ始めている。敵である…敵だったエグリアース、オキュラス、ボズ達の気の遣いに対しての自分の態度が妙に恥ずかしく思える。『死』を受け入れなければならぬ。ステューの気持ちは少しずつであるが前向きに

進みかけていた。

…？

…声。

どこかで聞こえる声。聞いたことのある声。思い出したくもない声。

いや…叫び声。

ステューの顔が青ざめる。身体中に奮えがきた。

この絶望の雄叫び。

どこまでついてまわるのであろうか。忌まわしい、呪いの、異形の、怪物。

キシヤアアアアアアアア！！

数十体の化け物が現れた。

そう、それは、ジャムと呼ばれる怪物。かつて古の時代、絶望神の下僕として扱われていた獣。

絶望獣…ジャムの出現だった。

「そんな…」

驚愕のステュー。アリシエを無理矢理起こして、町の中へと駆け込んで行った。もはやエグリアースの安否を気にする余裕はなかった。

薄っすらと意識を取り戻したエグリアースは、フラフラと立ち上がった。

襲われる前に見た光景。絶望獣が地面から生まれていく場面。既に遅かった。生まれし絶望の獣は活動を始め、町へ向けて襲撃を開始していた。

エグリアースは探し始めた。それはステューでもアリシエでもない。エグリアースを襲い、絶望獣を生ませた張本人、あの奇妙な男。戦士としての屈辱と、止めるべき殺戮の使命感。エグリアースの今の任務はあの男を倒すこと。ただ、それだけである。

だが、その場に男はいなかった。町へ移動したのだと確信したエ
グリアースはステューから遅れること数分、グレン町へ向かった。
全員の武器をしっかりとその腕に抱えながら。

つづく

第2部 第5章 乱入する混乱 その4

「GREEKS、お前、まさか…」

兄のボーダーが悲痛な声を出した。信じられないという目つき。リゾートも拳動不審な動きでオタオタとしている。

バロゲニア神殿内、会議室。大神官デスペラドが2人の賊の手によって襲われた。手引きをしたのは、デスペラドの4人息子の1人、ヴィジョンズ。だが、この邪悪な男は、首謀者を末っ子のGREEKSになすりつけようとしているのだ。打ち合わせ通りに賊が芝居を始めたのだ。周りの人々も呆気にとられている。

「なっ…なにをいつてるんだ、兄さん、そんなことあるわけないだろう」

GREEKSは動揺して叫んだ。だが、頭の奥は未だ冷静に状況を分析している。やられた。ヴィジョンズの罠だった。この場面で賊のあの台詞は効果絶大である。嘘でも本当のように聞こえてしまう。「言われた通りにしたんだからさ、ねえ、GREEKS様あ」

懇願するように賊の1人が続けて言う。

「黙れっ！」

GREEKSは怒鳴った。…しかし、どんな言い方をしようが、疑心暗鬼になってしまった周りを説得させるだけの術はなかった。何故なら、真の首謀者はヴィジョンズだという証拠がない。

GREEKSの天才的な頭脳が煌めく。あの賊はかなりの腕前である。こういったことに慣れている。そんな輩をヴィジョンズが知っているわけがない。そうなると…ヴィジョンズの裏に、まだ何かいる。黒幕が…。

賊がデスペラドの身体から離れたのを確認して、ルキボル国王子、オークランドがデスペラドの方へ走り出した。

「なんだあ、あの若造？」

ブロウフィッシュ王が馬鹿にしたように言った。

オークランドは走りながら、呪文を唱える。

「癒しの精霊、慈悲の精霊、我の声に応えよ生命の精霊、右手に宿りし希望の光よ、太陽神の名のもとに、今こそ、その力を大地に捧げよ……」

「そうか、彼は医療大国ルキボルの者」

アーガス国、ダニエル王が言った。

頼りなさそうでも医療の国ルキボルの王子である。子供の頃から英才教育をされてきたに違いない。それに、あれだけ臆病な王子が人を救うという1点において、戦士の顔になっている。

オークランドは右手をかざしながら滑り込むようにデスペラドの身体に飛びついた。医師の能力をも超えた力、回復の魔法、ルキボル国の一部の者しか使えない。オークランドはその1人であった。

「回復魔法、『サイツ』」

オークランドの光り輝く右手がデスペラドの傷跡に触れる。一緒にデスペラドの身体も輝いたかと思うと、すぐに光は失速した。

「な・な・なんだ。ど・ど・どうしたんだ」

リゾートが言った。

医療の国とはいえ、寿命や終わった命には絶対に勝てない。どんな力をもつてしても生き返らせるということは自然の摂理を無視した方法である。ルキボル国の回復魔法とはあくまでも回復なのだ。生き返らせることは絶対に無理なのだ。

「……間に合わなかった……既に、もう、即死していました……」

うな垂れてオークランドは呟いた。

「くっそお」

長男のボーダーは怒りの目を、ギリクスに向けた。

「よくも！ギリクス、よくも偉大なる父上をつ！」

「兄さん、信じてくれっ、どうして俺がそんなことを……」

「お前は父上と揉めていたそうじゃないか、昨夜でも言い合いをしていたと聞いたぞ」

横からヴィジョンズが狙い済ましたように口を出した。

そんなことくらいで危険を冒すわけがない。考えれば単純なことであるが、その単純なことに皆は気づいていない。周りの雰囲気は麻薬となつて、もはや何を言つても無駄な空気が漂っている。

「捕らえるしかないだろう、もう、このような状況であるならば」
今まで一切口出しをしなかった、ドルコルド国マルーン教皇が突然口を開いた。

こいつが黒幕か。…グリークスは疑いも持たず確信した。ヴィジョンズを裏で操っている本当の首謀者、マルーン教皇。

「ブランチ、捕らえよ」

マルーンは部下であるブランチに命令した。

今の今まで何も動かなかつた者が直前になつて仕切り始めた。グリークスの疑問は決定的になった。

グレン町は騒然となった。

見たこともない怪物の出現。成す術もなく繰り広げられる殺戮。

ステューはアリシエの手を引きながら、ハッシュ達を探した。かつて自分達がやったことが今ここで、行われている。

「うわああああ」

「なんだ、この怪物はあ」

「たっ…助けてくれえ」

泣き叫ぶ人々の悲鳴。

襲い来る怪物を気にしながら走っていたステューは誰かにぶつかる。

「痛っ…」

「あつと、ステューじゃないか」

同じ子供の声、自分の名前を知っている子供は1人しかいない。

ボズである。

「ボ・ボズ、見たか、絶望獣の群れだ」

ずっと無口だったステューの切羽詰った喋りにボズは驚いた。

「あ…うん、びっくりしたよ。そっちは？エグリアースさんは？」
「わからないんだ。起きたらいなかった。そして、いきなりこういうことさ。巻き込まれたに違いない」

「そうか…」

ボズはアリシエの無事を確認して、オキュラスを呼ぼうと振り向いた。

キシヤアアア。一体のジャムが襲い掛かってきた。

「うわあ」

ジャムの鋭い爪を弱々しい鉄の棒がかるうじて弾いた。

「大丈夫か。みんなあ」

颯爽というより、ヨタヨタと現われたのはオキュラスだった。こんな状況でも登場の仕方に自分で酔っているように見える。武器を外に置いてきたために、まともに使えるのはこれくらいしかない。

ステューも慌てて持つてくる暇がなかった。

「後はこの俺に任せっ…うわあっ…」

ジャムは一体ではない。まるで津波のように溢れ出てくる絶望獣に紛れ込まれてオキュラスは消えていった。

「あ…」

その様を静かに眺めている3人の子供であった。

「どうなってるんだ」

ファミリストンがジャムを殴り倒しながらハツシュに言った。

「わからん、前触れなどなかったぞ」

白い髪を振り乱しながら、ハツシュはエグリアース達が心配なのか、町の外を見つめた。

「奴ら、神殿の方へ向かっているぞ」

絶望獣は雄叫びを発しながら、バロゲニア神殿が最終目的のように、突き進んでいった。

親の首が鋭い爪で刎ねられるのを目の当たりに見た子供。子供の

首が鋭い爪で刎ねられるのを目の当たりに見た親。ゲルニア国の出来事の再来とでも思える光景にファミリストン達は怒りを覚える。

小さな子供達の叫び声、ハツシュの目に今にも殺される数人の子供達の姿が目に入った。

「うおおおお」

大きく飛び跳ねたハツシュの身体はしなやかに、それでいて力強く、絶望獣を蹴り倒した。武器の大剣が手元になく、頼れるのは、頼りないこの鉄の棒と自身の拳だけだった。

「おおりゃあ」

すると横から大きな声が響いたかと思うと、いきなり飛び出た拳がジャムの顔を吹き飛ばした。

小麦色の肌、若々しい肉体、少し前に、揉め事を起こしたガシーベ国の戦士、ミシエルであった。

「あれ…あんだ…」

派手に別れた割には簡単に再会したことにキョトンとした視線をハツシュに送っていた。

「…ミシエル」

「っ、へえ、覚えててくれてたんだ、…え、そう、ハツシュ」

嬉しそうにミシエルは言った。この前とは随分態度が違う。どうやらミシエルはその場で機嫌が変わっていく気分屋のようだ。

「そんなことよりも…」

「そうだね、この化け物をなんとかしないとね」

ハツシュとミシエルは同時に絶望獣の群れの中に飛び込んでいった。

つづく

第2部 第5章 乱入する混乱 その5

絶望獣ジャムの進撃に気づいていない神殿の者達の視線は賊よりもGREEKUSを刺していた。

賊の方は、タイラー将軍が完全に抑えているために逃げることに出来ない。

濡れ衣を着せられたGREEKUSは、マルーン教皇の護衛であるブラランチが捕らえるべく差を詰めていた。

「観念しろ、GREEKUS」

父を亡くした悲しみで涙を流しながらボーダーが叫んだ。

「ち・ち・ち・父上を。よ・よ・よくも売ったな」

続けてリゾートが言った。

「兄さん、信じてくれ！俺じゃない。俺がそんな理由でするわけがない。言い合いなんていつものことじゃないか」

GREEKUSが後ろへ下がりがながら訴えた。

「それが溜まりに溜まって、とうとう爆発した結果だろう」

冷静にVEJIONSZが言った。

このVEJIONSZが賊の手引きをし、父であるデスペラドの殺害に加担したのだ。それに確信を持っているのはGREEKUSだけだった。

更には、賊を手配した者こそ黒幕。ドルコルド国のマルーン教皇。彼こそが今回の暗殺の首謀者というべき人物なのだ。

そこまでわかっていながら何もできないことにGREEKUSは悔しさを感じる。

「くっ……」

なんとしても生き延びて、証明しなければ。自分の無実を。兄の関与を。そして、ある国の策略を。

だが。

何も出来ない。GREEKUS自身戦闘経験はない。訓練は必要だっ

たので、習ってはいたが、実戦での経験は全くない。ブランチのよ
うな最前線で護衛をしている戦士と渡り合えるはずがない。グリー
クスは逃げ道はなくなっていた。

覚悟を決めたその時。

キシヤアアアアアアア。地面が揺るがすほどの雄叫びが響い
た。

一緒に人の助けを呼ぶ悲鳴が聞こえる。

「なんなのよっ」

ガシーベ国の女王、マリークレールが怯えて言った。

神殿内まで届くこの異様な鳴き声。周りの意識が一瞬引いた。

その瞬間をグリークスは見逃さなかった。

「あっ」

素早くブランチの横を擦り抜けて、グリークスは窓ガラスに身を
投げた。

ここは5階である。まずは落ちたら助からない。

しかし、ヴィジョンズは心の中で舌打ちする。

何故なら。

手引きした賊達が脱出する際の方法として、グリークスが身を投
げた窓を指示していたのだ。

例えば5階でも落ちて命をなくすことない。深い池があるのだ。し
かも、池までには何枚もの大きな布が張り巡らされていて、落下速
度が急激に落ちる。池に落ちるまでには、怪我をするような落ち方
はしないであろう。

グリークスもそのことを事前に知っていたのだ。

飛び出していたのはグリークスだけではなかった。賊の2人も隙
を見てタイラーの呪縛から逃れていた。絶望獣の雄叫びにタイラー
も気持ち揺れたのだ。

「くっ、しまった」

慌てて追いかけたが勢いに乗った賊に追いつくことはもはや出来
なかった。

「あつぶなかつたねえ、カインド」

「うつさい、名前を呼ぶと言つたろ、シール」

「あゝそつちだつて」

「うつさい、まだ、危機は脱してないんだぞ」

ヴィジョンズの横を走り抜けながら、2人は会話する。「うつ」というヴィジョンズの演技じみた身の避け方が滑稽に見えた。

「でもさ、さっきの奴が飛び降りたじゃん、もう僕らの逃げ道ないよね？」

「それでも、行くしかないだろう。逃げ道はここしかないんだ」

賊の2人はグリークスの後を追うように飛び降りた。

当然ながら、グリークスの抜けた後である。布はそこにはなかった。真下の池に急降下である。だが、池の奥は林だった。

「壁を蹴る、シール」

「なぐるほど、さすがカインド！」

落ちていく中、2人は同時に壁を蹴った。木に突っ込むことにより落下速度を無理矢理止めるつもりなのだ。身体は林の方へ方向転換し、木の中に突っ込んだ。

施設フライは限りなく人がいなかったために、絶望獣達はあつという間に制覇し、通り抜けた。目指すは、神殿内である。

地響きが鳴り、雄叫びがあがり、徐々に近づいてくる。

各国の側近達は自分の主君を守るために臨戦態勢へと変わる。

既にグリークスや、賊が逃げたことなど頭にはない。所詮は神官達との揉め事である。お家騒動である。自分の国に関わりがなければ、結局のところ、どうでもいいのだ。

ボーダーとリゾートは泣きながら、もはや動かない父の身体を抱きかかえて安全な場所へと運び出そうとしていた。

ヴィジョンズだけは、先程の窓を見つめていた。

彼が思つのはただ一つ。グリークスのことである。逃げられた。必ずグリークスは戻ってくる。ヴィジョンズはそう確信していた。新たに手を打たなければ。グリークスの命を断たないことには、安

心して神殿の政權を握ることが出来ない。

「なんなのだ、この雄叫びは」

ダニエル王が皆に質問した。

誰も首を振っている中、ニゴラス国の虹帽子が口を開いた。

「これは、絶望神の操る獣、ジャムの雄叫びだ。パール族がよく召喚していたからわかる」

「なんだとお、そこまでわかってるのなら、やっぱりお前らのじゃねえか」

ブラウフィツシュ王が叫んだ。

「違う、我らニゴラス国は、その雄叫びを知っているというだけだ。それも召喚などただの実験だと思っていたから全く脅威の認識はなかった。疑うべきは他にいるだろう」

虹帽子の反論に、マルーン教皇が気づいたように言う。

「なるほど。絶望神か」

その一言で一斉に視線が、ドリムオン陛下に注がれる。

「ええ、みんな何言ってるんだよ。確かに絶望神だよ。絶望獣も知ってるよ。でもね、真っ先にそう思われるのがわかってて、こんな馬鹿なことする奴が何処にいる？」

ドリムオンの言葉にもっともだと誰もが思う。

では、誰がこんなことを？

そんな犯人探しをする暇もなく、異形の怪物達が、神殿内の会議室に飛び込んできた。

知能の低い絶望獣はわからなかった。各々の王を守るために選ばれた側近、精鋭達の実力を。怪物たちを上回る力を持った戦士達がいることを。返り討ちにあい、その名の通り絶望するのは獣達だった。

第2部 第6章 動き出す運命 その1

何十体ものジャムが襲い掛かってきた。神殿、施設、町は、完全に崩壊するかと思われた。

だが、それは、何もない日常であれば…である。

今日は5年に1度行われるガルド会議の日。

今日は戦士がいる。兵がいる。王を守るための側近がいる。

7つの国の武力が一つの神殿に集っているのだ。

そこに崩壊という言葉は存在しない。

絶望獣が飛び込んできて6時間後。各国の総力を持って、全ての絶望獣を倒すことに成功した。

中でも驚愕だったのは、バロゲニア神殿内である。誰も傷つくことなく、圧倒的な力であつたという間に絶望獣を滅ぼした。

さすがは各国の王を守るために選ばれた者達である。所詮、知能を持たぬ獣は相手ではなかった。

被害があつたのは、施設フライと町グレンであつた。ここでも、側近達の活躍はあつたが、あまりの数の多さに全てを守りきることは出来なかった。

町人達に多大な被害が出た。親を殺され、子を殺され、生き別れになり、行方不明者も出した。

過去の会議の中でも前代未聞の出来事である。大神官が殺され、更には異形の怪物の襲撃。壊滅状態に追い込まれた。

大神官デスペラドを殺害した犯人として指名手配されたのは、息子であるグリークスと賊の2人。その犯人達は窓から飛び降りて逃げたのだ。

信じられないこの報告に人々は動揺を隠せなかった。大神官の死に泣き出す者もいた。世界の均衡が崩れる。中心である神殿がこのような状況なのだ、今までの統一感はなくなつてゆくだろう。ゲルニア国の滅亡、バロゲニア神殿の襲撃、世界はまさに暗黒へと向か

っているようであつた。

「みなさん」

バロゲニア神殿内、ヴィジョンズが静かに、各国に語りかけた。

「この度は大変申し訳ありませんでした。こんな事態になるなんて我々の警備が甘すぎたのが原因です。皆さんを命の危険に晒したことを謝罪します。同時に、皆さんの命が無事で良かった」

何か言いたそうだったのは、マリークレール女王とブロウフィツシュ王だったが、場の雰囲気がそうではなかったために黙る。

「しかし、最大の悲劇がありました。偉大なる我が父、大神官デスペラドが殺害されました。これは我々のこととはいえ、犯人である弟、いえ、もう兄弟の縁は切ります。反逆者グリークスと忍び込んだ賊の2人は必ずや捕まえて然るべき刑をもって執行します。みなさん、どうか協力をよろしくお願いしたい」

「わかりました。我らもその情報を流して、一日でも早く捕まえることができるように協力しましょう」

打ち合わせ通りにマルーン教皇が付け足した。さすがにこの状況では断るような者はいない。皆が頷く。

「感謝します」

ヴィジョンズは一礼し、更に続ける。

「今回のガルド会議はこれをもって閉会します。今はこの神殿を建て直すことが大事です。当面は私、ヴィジョンズが総指揮を執らせてもらいます。父デスペラドの葬儀の日程は後ほどお伝え致します」

「わかりました。皆さん、異議ないですか」

マルーン教皇が周りを見渡す。いつの間にかマルーンが仕切っていた。

異議はない。

ヴィジョンズはもう一度感謝の一礼をし、最後に付け加える。

「では、皆さん、これにて閉会します。準備が整い次第、帰国もよ

ろしいですし、滞在も歓迎します。それでは…」

施設フライ。

マリークレール女王は、イライラしながら、デュバルドと部屋に戻っていた。

「なんなのだ、せっかくきてやったというのに。このような扱いを受けるなんて。私は女王なのに」

「申し訳ありません、女王。国に帰り次第すぐに抗議文を出しましょう」

デュバルドが言った。

「当たり前よ」

そう言いながら、マリークレール女王は部屋に勢いよく入っていた。

デュバルドは待機していたレイを呼んだ。

「レイ、女王は帰国する。準備をしろ。町にいるミシェルとキャリーにも伝えておけ」

「わかりました。リサは…」

「それは今から私が呼びに行く」

「はい。では…」

レイは踵を返し町へと向かった。

デュバルドは溜息をつきながら、リサの部屋に向かう。まさか、会議がこんなことになるなんて思いも寄らなかった。女王が怒るのも無理もない。計画が台無しになったのだ。新たな血を取り入れる。リサをどこかの国の王族に当てつけて優秀な子を産ませるという計画。

デュバルドはリサの部屋の扉を叩きもせずいきなり開けた。叩いたところで返事がないことをわかっていたからだ。

「リサ、ガシーベ国へ帰るぞ。支度を…」

辺りを見る。気配がない。争ったような形跡もない。沈黙。デュ

バルドの動きが止まる。

「リサ…？」

青ざめる。血の気が引いていく。

デュバルドは部屋から飛び出して女王への報告に向かった。

三つ編みをした少女、リサが忽然と消えていたのだ。

「明らかにおかしいです、そういませんか？陛下」

タイラー將軍は不満を露わにした。勿論マルーン教皇のことである。

「手際が良すぎますよ。あそこでああいう言い方、ああいう持っていき方をされれば、文句を言えるわけがない。これには何かあるに決まっています」

興奮を抑えることができずにいるタイラーはドリムオン陛下に話しかけた。

ドリムオンは興味なさそうに笑って言った。

「別に…いいじゃないか。それくらい」

「それくらいって…」

「あやつが仕切るのならそれはそれでいいわい。それくらいで、このロクシー又国がどうにかなるってことはないだろう？」

頭を掻きながらドリムオンはアクビをした。

それを見たタイラーも考えるのを止めざるを得なかった。

「全く…必死になっている私が馬鹿みたいじゃないですか」

それを聞いたドリムオンは高らかに笑った。

「さあ、帰ろう、ロクシー又国へ。これから忙しくなるからな」

ドリムオンは、思い出したように続けた。

「おっと、その前に。タイラー昨夜の続きだ、『カルプ』やるぞ」

つづく

第2部 第6章 動き出す運命 その2

「ぐぬう。全く、今年の会議はなんだったのだ。こんな訳のわからないまま、帰らされるなんてな」

バリユアス国のブラウフィツシュ王は怒りをおさめることなく大きな身体に付いたぜい肉を揺らしながら歩いていた。その後ろをルリードが付いていく。

「それにしても、あの若造が、自分の親を殺すなんてな。なあ、ルリード、世も末だなあ」

「…」

今まで、ブラウフィツシュのどんな意味のないことや間違ってることに対して冷静に返事をしていたルリードからの言葉がない。ブラウフィツシュは怪訝に思う。

「どうした？」

「いえ、本当に彼なのでしょうか」

意外な台詞だった。『氷のルリード』と呼ばれた彼女は、自分に対する危機、国に対する危機以外に興味を示さない。他人がどうなるうとも、それが自分に対して何も被害がなければ、気になど一切しない女であった。

そのルリードが初めて意見を述べた。ブラウフィツシュ王は好奇心にとらわれた。

「どういうことだ？」

「美食の国という訳ではないのですが、単に私の妄想というか、持論というか…」

「いいから言ってみろ」

「はい、…、私が思うに、美味しい料理を作る者には、悪者はいないという…」

俯き加減でルリードは言った。さすがのブラウフィツシュ王も冷酷と呼ばれたルリードの言葉とは思えなくて、口が開きっぱなしに

なった。

どのように言葉をかけていいのかわからずにブラウフィッシュは身支度をするために、ルリードを残し部屋に入ってしまった。

ニゴラス国、虹帽子の7人は、誰一人何も言わずに部屋に入り、何も言わずに身支度をし、何も言わずに帰国への道を選んだ。

内心は、パール族の関与疑惑から話がすり替わったようになったので、喜んでいるのだろう。

国へ帰り、早く対策を練らねばならない。

間違はなく、これは、大きな戦乱の渦に発展しそうだと確信した。負けるわけにはいかない。虹帽子の7人は強く心に誓った。

実は一番大神官デスペラドの死に心底悲しく思い、心底怒りを抱いているのは、アーガス国のダニエル王であった。

「なんとしても捕まえるのだ。いいな、賊は覆面をしていた。だが、グリークスならば見つけることが出来るはず。必ず、捕まえるのだ」結果ばかり求める言い方をする。方法は何も指示がない。いかなる手段を持っても…という意味だろうか。鷹の三騎士、仮面のジューダスは混乱した。だが、返事は一つしかない。

「御意」

「すぐにスノーに連絡を取り、町中を調べ上げるのだ。ある程度の結果がでるまでは、ここを離れないぞ」

ダニエルはそう言うと言分の部屋に戻っていった。

同じく鷹の三騎士の少女ジェイミーとジューダスは顔を見合った。

「探すしかないですわ」

「うむ…スノー殿に報告しよう」

ジューダスは引き続きダニエル王の前に立ち、ジェイミーが報告へと動いた。

部屋の中からは、ダニエル王が怒りで物に当り散らしている音が聞こえた。

ルキボル国オークランド王子の心は憂鬱だった。
帰国しないといけない。

あの、同じ血を分けた兄弟達と、殺し合いをしなければならないのだ。

出来ることならば、戻りたくはない。
だが、ここに留まる理由もない。

オークランドは愛馬ストラングがいる納屋へと足を向けた。

これから1人での帰路。願わくば何事もなく国へ辿り着きたい。
兄弟が罫を仕掛けているかもしれない。家族を疑いたくはない。しかし、誰も信じることができない。

オークランドは歩き出した。父の遺言状をしっかりと握り締めて。

各国が部屋へ戻っていく中、ドルコルド国のマルーン教皇だけは
その場に残った。

後ろにはロンシュタットとブランチが待機している。

ヴィジョンズが近づいてきた。彼もボーダートリゾートを奥へと
引っ込めさせた。

「なんとか終わったな」

ヴィジョンズが少し笑顔を見せた。

つられてマルーンも笑顔になる。

「ああ、なんとか…な」

マルーンは「しかし」と言葉を続けた。

「君の弟が逃げるのは計算外だったな」

「すまない、まさか、こんな形になるなんて。だが、手配はした。
見つかるのも時間の問題だ」

悔しそうにヴィジョンズは言った。

「だいいいがな」

「まずは父の葬儀の後だな、私が新しい大神官として宣言する」
ヴィジョンズが嬉しそうに、待ちきれないように言う。更に続ける。

「そして、世界の新しい指導者として…」

視線が向く。マルーンの方へ。

「私を指名する…」

マルーンが呟く。

「そうだ、聖国ドルコルド、マルーン教皇、貴方が、世界の指導者だ」

ヴィジョンズが改めて言った。

「そのためには、排除しておかないといけない、人間や国があるな」

「ああ、だからこそ、世界の均衡を崩す時だ」

マルーンとヴィジョンズは不気味に笑った。

つづく。

第2部 第6章 動き出す運命 その3

ミシエルとハツシュは、疲れ切っていた。

絶望獣を倒すために、体力を使い果たしたためである。

2人ともその場に寝転がり、もう動けない様子であった。

「ハツシュ… あんたやるじゃないか。武器もないのに」

ミシエルが言った。その吸い込まれそうなほど綺麗な瞳は尊敬の視線をハツシュに送っている。

「そういうお前も。さすが、有名な戦士だ」

ハツシュもお返しの賛辞を伝える。

その近くで、同じようにボロボロになっているファミリストンがいた。

ハツシュとミシエルの最前列での戦いに呆れていた。先頭に立って迫り来る絶望獣を殴り倒していったのだ。この2人がいなかったら、町はもっと被害が出ていただろう。

遠くから呼ぶ声が聞こえる。

「おおーい」

聞いたことのある間の抜けた声。

オキュラスであった。彼もまた怪我はないが、酷い姿である。

「オキュラス、無事だったか」

ファミリストンが言った。

オキュラスの手にはハツシュの大剣や武器があった。どうしてオキュラスが持っているのかとファミリストンは聞いた。

「あそこにあったんですよ、捨てるように」

何の疑問も持たずにオキュラスは答えた。

そうではない。町に武器を持ち込んではいけないのに、その町の中に武器がある。ということは誰かが運んだに違いない。それは、子供たちでは無理な重量だ。そうなると、エグリアースしかない。ならば、新たな謎が出る。何故、エグリアースは武器をここに置

いたのだ？

「そういえば…」

ハッシュは気づいた。

「ボズや、ステューやエグリアース達は？」

その問いに、オキュラスは答えることができなかった。絶望獣と戦っていて、何処に行ったのかわからないのだ。

「探すぞ」

ファミリストーンは真面目な顔になった。

ハッシュも起き上がろうとした。

「ミシエル」

「あっキャリー」

ちょうど、ミシエルの連れであるキャリーが彼女を呼びにきたのだ。

「そうか、女王が…相変わらず勝手だな…」

ミシエルは呟くと、ハッシュの方を向き直った。

「ハッシュ、あたし達は国へ帰る。いつかまた会う時があるならば、その時こそ、この前の決着をつけよう」

「…ああ」

笑顔のミシエルにハッシュも笑顔で答えた。

それから、ハッシュとファミリストーン、オキュラスの3人はボズ達の搜索を続けた。

ハッシュの師クラシェイカの予言である、ここで会える英雄のこなど、既に頭にはなかった。今は探すのが先決である。

しかし、ボズ達を、見つけることは出来なかった。

ボズ、ステュー、アリシエの3人の子供達は既に町の外に出ていた。

絶望獣から逃げ回っている内にいつの間にか外に出る羽目になってしまったのだ。

「どうする？ここで皆を待とうか？」

ボズの質問に、アリシエが答えることはない。…となるとステューだけが、ステューも口数が多いわけではない。具体的な返事が出てこないのだ。

「…ったく…じゃあ待つてようか…」

ボズは座った。

すると、ボズの視野の中に何かが入ってきた。人である。

たった1人の…女の子がフラフラと歩いていた。

「ええっ」

ボズは驚いて女の子の元へと走った。

近づくにつれて、女の子の姿がはっきりと見えてきた。三つ編みをしている女の子、視線は虚ろで何処を見てるのかわからない。目的もなくただ歩いている。

「あ、あの…、1人で大丈夫？」

ボズは恐る恐る話しかけた。

返事はない。

「…」

この子もか。心の中で叫ぶ。

「1人は危険だよ、僕達もここで人を待っているんだ。良かったら、一緒にいない？」

返事はない。

「君、名前あるの？あるよね、もちろん。名前は？」

「……リサ」

ようやく口を開いた。声が聞いた。透き通る爽やかな声。

「そうか、リサっていうのか、じゃあ、リサ、僕たちと一緒に…」
ボズを無視し、それでも止まる様子もないリサは、先へと進む。

「ちょ…ちよつと待つてよ、危険だよ…1人は…」

ボズはリサを追いかけた。途中振り向いて、ステューとアリシエに手招きした。

「おゝい、ステュー、アリシエ、こつちこいよゝ、この人を1人には出来ないから、付いていくよゝ」

ステューとアリシエもボズの後を追っていった。

金髪の男シールと赤髪の女カインドは、覆面を取り、何食わぬ顔で町の中に紛れ込んでいた。

この2人こそ、ヴィジョンズの手引きで神殿に侵入し、大神官デスペラドを殺害した賊。その罪を段取り通りギリクスに擦り付けた。土壇場でギリクスに逃げられたのは予想外であった。

シールとカインド。聖国ドルコルドの戦士で、主に潜入や暗殺を得意とする。

「それにしてもさ、危なかったねゝカインドゝ」

軽い口調でシールが言った。シールの実力は認めていながらも、このふざけた性格に苛立ちを隠せないでいる。

カインドは深刻な表情だった。仕事はまだ終わってはいない。筋書きではない展開。ギリクスが逃げた。彼を始末しなければならぬ。

「シール、逃げたギリクスを探すぞ、息の根を止めねばならん」

「えゝ、面倒臭いゝ」

「うつさい！あたしの仕事には失敗は許されないんだ」

「あいあゝい、わかったよゝ」

シールとカインドの2人は町の中へと溶け込んでいった。

つづく

第2部 第6章 動き出す運命 その4

その奇妙な男は、町を離れ、外で静かに座禅を組んでいた。絶望獣ジヤムを呼び出した男。バロゲニア神殿を崩壊一步手前まで追いやった男。

そんなことなどなかったかのようにただじっと座っている。

男は閉じていた目をゆっくりと開けた。

「何だ、まだいたのか」

男はそう言つて振り向いた。

そこには、剣を抜き構えているエグリアースがいた。

エグリアースがハツシユ達の武器を持って町の中に入った時に、男の姿を見て、武器をそのままにし、後を追つたのだ。オキユラスが放り投げた武器を見つけたのはその少し後だ。

「危険な奴を野放しには出来ない」

エグリアースは言った。

恐怖を体験しているエグリアースから見れば、あの絶望獣を生み出したこと自体、危険人物の何者でもないであろう。近い将来、世界の害となると判断したのだ。

「何者なんだ、貴様は」

エグリアースが問う。

男が立ち上がる。笑みを浮かべながら。

「世界を我が物にしようとしている者がいる…。そのためには世界の均衡を崩すことが最善だとその者は考えた…」

男は急に話し出した。

「何を言つてる？」

エグリアースは眉をひそめた。

「まずは中心で世界の国々をまとめている場所を混乱させること。5年毎に行われる会議の日に合わせて、最高責任者である大神官を殺害すること…」

淡々と男は喋る。

エグリアースの背筋が凍る。

「俺は、混乱を任された。絶望獣を呼び出し、襲わせる。それ以外の目的はない。『混乱』が俺の目的なのだ」

「な・なんだと……」

エグリアースは無意識に後ろへ下がる。

男は、更に続ける。

「俺は、絶望神メンデルゴスの配下、四天王の1人、獣使いのヌアリス。闇の世界へ行く土産に教えてやろう。俺は聖国ドルコルドの戦士」

「……で、では、マルーン……」

言いかけたエグリアースの口から大量の血が吐かれた。

「がっ……」

男、ヌアリスの手刀がエグリアースの身体を貫いていた。

剣を振る暇もなかった。目で追うことも許されなかった。

気がつくと、血を吐いていた。

「真実を抱いて死ぬがいい。絶望神、メンデルゴス様は、あと少しで復活する。ドルコルド、マルーン教皇の協力の下……な」

エグリアースの目の前がボヤけていく。身体に力が入らない。悟る。死が近い。

手が抜かれ、エグリアースが崩れ落ちる。

「ぐっ……ぐっ……」

エグリアースを冷たい視線で見下ろすヌアリス。もう長くはないと見極めたのか止めを刺さずにその場を離れた。

「世界は……変わる」

そう一言残して。

エグリアースは自分の死を覚悟した。だが。このまま息絶えるわけにはいかない。必ず、自分の屍をファミリストーン將軍達が見つけるはずだ。その時になにか推理できるものを残さなければ。

エグリアースは最後の力を振り絞って、剣のある方向へ向ける。

その先は、ドルコルド国の島が位置する方向。これで理解できるだろうか。これしかもう何も出来ない。動かない。動かすことができない。

「ファ、ファミリストン、將軍……」

エグリアースの意識は永遠に遠のいていった。

「おい、大神官様を殺した犯人って……」

「ああ、聞いたよ、GREEKSさんだろ？」

「まさか息子が犯人だなんて……」

「デスペラド様もさぞかし無念であろうな」

「でも、本当にGREEKSなのか？」

数々の噂が飛び交う町中の片隅でGREEKSはひっそりと身を隠していた。

かろうじて逃げることに成功したが、この町から脱出しないことには逃げたことにはならない。ここにおいては捕まることが時間の問題だからだ。いまや、GREEKSはヴィジョンズの指示で最重要指名手配人とされているのだ。

GREEKSには目的ができた。旅に出る？ いや、違う。父デスペラドの仇を取る。真の裏切り者のヴィジョンズを、本当の首謀者のマルーン教皇を、必ず、地獄へ落とさなければ。

そのためには、捕まるわけにはいかない。今、捕まれば、間違はなく処刑台へ一直線だ。自分の親を殺すような人間だ。ヴィジョンズにはもうためらいなどないだろう。

抜け出すのなら夜しかない。GREEKSは再び身を潜め、静かに石のように闇を待つ。自分の身体がまるで消えてなくなり、闇に溶け込むように。

ゲルニア国の滅亡、バロゲニア神殿の混乱により、世界の均衡が

崩れる。

暗黒の時代へ、絶望神と共に、訪れる、恐怖の時。

相対するのは、希望の光、太陽神。

世界を巻き込み、各国を巻き込み、人々を巻き込み、戦乱の世へと遙かなる道が開かれている。

そこを歩くのは、絶望か希望か。

運命は、ついに動き出す。世界の崩壊、修復、そして……。頂点へと立つ指導者は一体誰なのか。

神さえも知る由はない。

第6章 動き出す運命 終

第2部 ガルド会議 エピローグ 予言を信じて

剣の国、アーガス国内。

町の奥にある家。

伝説の剣士、今はただの隠居中の老人であるクラシェイカは、日課の酒を買い、果物を買い、戻ってきた。

「帰ったぞい、ほれ、食べるんじゃ」

クラシェイカは果物を、食卓の上に置いた。

「すみません、ありがとうございます」

果物に手を伸ばした少年は、数ヶ月前に、クラシェイカの元に現われて、以来ここに住んでいる。

少年の名はルシアといった。

ルシアは、果物を丁寧ナイフで半分に切り、更に簡単に食べるように切り、クラシェイカにも渡す。

自分で食べながら、ルシアは荷造りの続きを始めた。

「行くのか」

クラシェイカが寂しそうに言った。

「ええ、僕は貴方を信じます。僕が貴方の言うとおりの者で、7人の仲間がいるのなら。貴方の予言の場所へ早く行かねばなりません」笑顔でルシアは言った。その瞳には強い決意がみられる。

「そうか：1人で大丈夫か？もう何日かすれば、ワシの弟子が帰ってくるはずだ。あやつを供に連れれば…」

「いえ、大丈夫です。そのお弟子さんも英雄なのであれば、必ず会えます。それに、僕はまたこの場所に戻ってきます。安心してください」

ルシアは黒い衣を着て、荷物を担いだ。準備が整ったことを意味する。

「わかった。くれぐれも気をつけるのじゃぞ。お前の身体は、お前だけの物ではないのだからな」

「はい。僕の身体は太陽神と共に。でしょう?」

そう言つと、ルシアは扉を開け、外へ出た。

「じゃあ、クラシェイカさん。いってきます」

その笑顔に勝る輝きはないようにクラシェイカは眩しそうに目を細めた。

第2部 ガルド会議 終 〳 第3部 へつづく。

第6回 こぼれ話

いつも読んで頂きありがとうございます。

4月から細々と始まったこの小説もとうとう年を越すことになりました。

ありがとうございます。

ようやく、全15部内の2部が終わりました。
長かったです。

とくに第2部の最初は大変でした。

ガルド会議は、各国が集合する設定で、各国の首脳が出席するということになり、一番偉い人が1人ではこないだろうと、ならば、側近とかくるじゃ〜ん。ってことになり、大多数の登場人物を出す羽目になりました。

前回の第1部でも出しすぎて誰が誰だかわからない！との神の声もあり、その理由は文章力の低さだと反省していたのも束の間、倍の数の人間を出してしまいました。

それぞれの国での基本人物を先に紹介したくて、それと、その中にある後々の英雄になる人も前振りも含めて出さないといけないと思ったからです。

（密かに登場人物がいっぱいなのが元々好きという説もある）

それにより、混乱した人、全部が同じに見えた人、てゆ〜かハッシュって誰？ってなった人、申し訳ありませんでした。

これではいかん！と、「教えて！七英雄物語」となるサイトを立ち上げて、裏設定などを書いていこうと意気込んだのはいいですが、ねえ、更新してる？って状態に…。

あああ〜すみません〜。

次回の第3部は、そんなに登場人物…で…出ませんから…。
多分。

さて、今後の話ですが。

お待ちかね！？？

やっと、本当の主人公である、ルシア登場です。

ルシアがある人達と一緒にになり、一緒に旅をし、ある国へ行き、
活躍する話が第3部です。

それは誰でしょうか。国は何処でしょうか？

第3部のタイトルでそれは容易に想像できますので、まだ伏せて
おきます。

ルシアはこれから、レギュラーになることを祈る。

……… ってならないの？！

スケジュールですけど。

今年もあと1週間。

第3部は年明けに開演します。

それまでは、「教えて！〜」の方を充実できるように頑張ります
ので、基本的には、今回でしばらくお休みを頂きます。

もし、興味がもってもらい、読んでいただけるのであれば、この
休みの間に追いついてみてください。

それでは。

よろしく願います。

もしかしたら……年明け直前に……更新したり……
・むふ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9698a/>

七英雄物語 2

2010年10月8日14時58分発行